
デリダ、ゲー、柄谷

『グラマトロジーについて』と『資本論』をめぐる交錯

KARAHASHI Sob

唐橋 聡

はじめに

ジャック・デリダの思索の歩みのなかで、マルクスおよびマルクス主義との接点が前景化する的是そのキャリアの晩年においてであるようにみえる。デリダのマルクスへの接近は、とりわけ『マルクスの亡霊たち』(1993年)とこの著作への様々な反響に対する応答として書かれる『マルクスと息子たち』(1995年)とともに記憶されていると言えよう。それらの仕事はソビエト連邦の崩壊と冷戦体制の終焉を背景に、自由主義、資本主義の勝利と政治原理としてのマルクス主義の失効が喧伝された時期になされた。マルクスとマルクス主義の死が声高に叫ばれた時にデリダによってなされた「マルクスの継承」の試みは、なによりその反時代的な身ぶりにおいて歴史的なインパクトをもった。また、デリダのマルクスへの接近が人々の耳目をひいたもうひとつの外在的要因として、デリダ自身がそれ以前にマルクス主義に対して明確な距離をとってきたことがあげられるだろう。取り扱うテキストとしても、政治的立場のうえでも、90年代までデリダがマルクスとマルクス主義の近傍に踏み入ることはなかった。それは60年代にエコール・ノルマル・シュペリウールでデリダと同僚であった共産党員哲学者、ルイ・アルチュセールのマルクスへの傾倒と好対照をなしている。とはいえ、デリダと彼の仕事が、マルクスとマルクス主義から無縁であったと断じることではできない。デリダは『マルクスの亡霊たち』のなかで、60年代以来の脱構築の思想的歩みを振り返って次のように述懐している。

時間がないので、ここではたとえば、脱構築とよばれるもののいくつかの特徴に、最近何十年かの脱構築が当初まとった形象におけるいくつかの特徴に、すなわち〈固有なもの〉、ロゴス中心主義、言語主義、音声主義といったものの形而上学の脱構築、言語の自律的ヘゲモニーの脱神秘化ないし脱-沈殿化に話を限定することにしよう […。]。そのような脱構築は、前-マルクス主義的な空間では不可能かつ思考不可能であっただろう。少なくとも私の目には、脱構築はある根本化としてしか、ということは同様に、ある一定のマルクス主義の伝統のなかでしか、ある一定のマルクス主義的精神のなかでしか、意味も重要性も持たなかった。こうした脱構築と呼ばれるマルクス主義の根本化の試みがあったのだ [Il y a eu cette radicalisation tentée du marxisme qui s'appelle la déconstruction] […。]⁽¹⁾

(1) Jacques Derrida, *Spectres de Marx. L'État de la dette, le travail du deuil et la nouvelle Internationale*, Galilée, 1993, p. 151 (ジャック・デリダ『マルクスの亡霊たち』増田一夫訳、藤原書店、2007年、198-199頁)。強調はデリダ。なお、

欧文文献の引用に際しては邦訳があるものは可能なかぎり参照したが、必要に応じて訳文の表現を変更した箇所がある。

数十年来の「マルクス主義の根本化」としての脱構築の営み、この言葉を単なる前口上や遅ればせにマルクスを語ることの事後的正当化として退けることはできない。というのも、デリダとマルクスを結ぶ線はデリダ本人によってではないにせよ、デリダの仕事に靈感を得た人々、彼の周りに蟄集する人々によって、様々な形で描かれてきたからだ。デリダは上の引用箇所が続く段落に付された註のなかで、そのことを明記している。

もしかすると、この場においてこそ以下の点を強調するべきかもしれない。すなわちマルクス主義と脱構築とは、1970年代のはじめから、あらゆる観点からして多様な、しばしば互いに対立するか互いに還元不可能であるかのような数多くの研究を呼び起こしてきた。その数はあまりにも多いので、ここでそれらを正当に扱い、私がいかにそれらに負っているかを見極めることはできない。マルクス主義と脱構築とを本来の対象とした著作 (Michael Ryan, *Marxism and Deconstruction, A Critical Articulation*, Johns Hopkins University Press, 1982、あるいは Jean-Marie Benoist, *Marx est mort*, Gallimard, 1970 など。[…]) 以外にも、ここで列挙することが不可能な数多くの試論 (とりわけ、J.-J. Goux, Th. Keenan, Th. Lewis, C. Malabou, B. Martin, A. Parker, G. Spivak, M. Sprinker, A. Warminski, S. Weber のもの) を喚起しなければならないだろう。⁽²⁾

それぞれマルクス主義と脱構築を直接扱う単著をもつマイケル・ライアンやジャン＝マリー・ブノワにつづいて、二つの思想の対話を試みた論考として、その筆頭にジャン＝ジョゼフ・グーの名があげられていることに注目したい。グーの論考としては前衛文芸誌『テル・ケル』に発表された「古銭学 [Numismatiques]」がつとに有名であるが、デリダとマルクスの接合の試みという観点からいえば、それに先だって書かれ、同じく『テル・ケル』に掲載された「マルクスと労働の書き込み [Marx et l'inscription du travail]」がより明確にこのラインにそったものになっている。またこのグーの68年のテキストは、当時のテル・ケル派の面々の思想傾向の典型を示しているという点でも注目に値する。テル・ケル派の理論的マニフェストともいえる『理論集成 [Théorie d'ensemble]』に、60年代デリダを代表するテキスト「差延 [La différance]」とともにグーのこの論考が再録されていることは、デリダとマルクスの重ね合わせという当時のテル・ケル派の戦略を象徴的に示している。

(2) *Ibid.*, p. 152-153, Note 1 (同上、387頁、註(6))。

グーの仕事とともにデリダとマルクスを結ぶ線として着目したいのは、柄谷行人のマルクス論である。柄谷をグーに対置することの意義は、両者の共通点を背景としたときに際立って浮かび上がる対照性を捉えることにある。グーと柄谷は、言語と経済のアナロジーを軸にマルクスとデリダの架橋を図ろうとする点で明瞭な共通点をもつ。その一方で、両者の経済と言語のアナロジーには、生産と流通という二つの準拠点の差異が見受けられる。この視座を異にする二つのアナログな思考は、デリダとマルクスを結びつけるときの対極的なアプローチを跡づけていると見ることができる。

そして、グーと柄谷という初期デリダの読み手によるマルクスへのアプローチの検討は、90年代のデリダ本人によるマルクス論を、時を遡って60年代後半のデリダが取り組んでいた問題系へと接続するための補助線となるだろう。したがって、本稿は、グーと柄谷のマルクス読解を手がかりとして、初期デリダの思想、とりわけエクリチュールをめぐる思惟が秘めるマルクスの契機を探り、デリダ自身は書き記すことのなかった脱構築とマルクスの潜在的な交錯を素描する試みとなるだろう。

1. ジャン＝ジョゼフ・グーにおける「マルクスとデリダ」

グーは、『テル・ケル』第33号に掲載された「マルクスと労働の書き込み」⁽³⁾(以下「労働の書き込み」)のなかで、言語と経済のアナロジーを用いて、デリダのエクリチュールの思想とマルクスの商品経済の分析の接合を試みている。このグーの論考は、テル・ケルの理論的テクストを集約した『理論集成』にも所収されており、また同書に名を連ねるフィリップ・ソレルス、ジュリア・クリステヴァ、ジャン＝ルイ・ボードリヤールといった面々の論考⁽⁴⁾と同じ理論的・戦略的地平を共有しながらも、デリダとマルクスの「相同性[homologie]」の追究とインターテクスチュアルな突き合わせ——二人の著述家の名によって囲われるコーパスの壁を飛び越え、ほとんど一方の言わんとすることを他方の言葉によって代弁するかのごとく展開する——の徹底性において際立っている。その意味で、グーの論考は69年当時のテル・ケル派によるデリダ＝マルクス主義の極点を画すものと言える。本章では、デリダとマルクスを繋ぐ結節点

(3) Jean-Joseph Goux, « Marx et l'inscription du travail », publié initialement dans *Tel Quel*, n° 33 (Seuil, 1968), reproduit dans *Théorie d'ensemble* (coll. Tel Quel, Seuil, 1968), et repris sous le titre de « L'inscription du travail », dans Jean-Joseph Goux, *Economie et symbolique. Marx Freud* (Seuil, 1973). 以下、同テクストの引用に際しては、上掲の *Tel Quel*, n° 33 (*T. Q.*33と略記)により、同誌の該当頁数と

ともに *Théorie d'ensemble* (*T.E.*と略記)の対応箇所を併記する。

(4) 各論考は以下の通り。Philippe Sollers, « Écriture et révolution », *Théorie d'ensemble*, *op. cit.*, p. 67-79, « Le réflexe de réduction », p. 391-398; Julia Kristeva, « La sémiologie: science critique et/ou critique de la science », p. 80-93; Jean-Louis Baudry, « Linguistique et production textuelle », p. 351-364, « Le sens de l'argent », p. 406-411.

に注目しながら、グーの「労働の書き込み」の議論を追っていく。

1-1. 言語の使用価値と交換価値

グーはその論考を『資本論』⁽⁵⁾における価値と労働のカテゴリーの確認からはじめる。まず照準されるのが商品の価値の二つの規定、「使用価値」と「交換価値」の区別である。この二種類の価値は、それぞれ異なった労働のカテゴリーに対応している。使用価値は、個別の生産物それぞれが備えた特殊な有用性を意味する。生産物の使用価値の特殊性は、それを生産するための「具体的労働」の質的差異に対応している。具体的労働の質が異なれば、それによって生産される使用価値も異なる質をもつというわけだ。対して交換価値は、各種の労働の特殊性を超えて、人間の社会的な労働すべてに共通して見出せる「抽象的労働」に対応する。

グーは、商品に見られる使用価値－具体的労働／交換価値－抽象的労働という二系列のカテゴリーを言語の領域にも見出す。言語における交換価値とは、伝達や表現のなかでも、また別の言語へと翻訳される際にも無疵のまま保存される「意味」にあたる。グーは、アリストテレスからマルチネまでの言語観において、あらゆる言語に共通の特徴として翻訳可能性が想定されてきたと指摘する⁽⁶⁾。西洋の言語観を支配してきたのは、言語をもつばら流通過程における機能、つまり交換価値－意味の伝達において捉える思考であったとされる。すなわち、言語を、意味伝達を媒介する記号と見做す言語観である。そこでは、言語記号は市場経済とのアナロジーのなかで「商取引の要素」になぞらえて考えられる。市場において貨幣を介して同等の価値をもつ商品どうしが交換されるように、言語活動においてもある記号(シニフィアン)が同一の意味を担う別の記号(シニフィアン)へと翻訳されうる、というわけだ。

他方、言語における使用価値とは何か。グーは言語における使用価値を二つの性質によって分類する。ひとつは、言語を直接的な消費の対象とするあり方、つまり意味を介さず言語それ自体が享受の対象となる使用価値である。これについては、フロイトが記述した子どもの言語獲得の過程が想定されている。フロイトによれば、子どもの初期の語彙学習においては、意味的連関ではなく、言葉の音的な類似性に基づく連想が優位にある。子どもが音的な

(5) グーは『資本論』第一巻の出典を明記していないが、訳文から判断して、*Le Capital, Livre premier, tome I-IV, traduit par J. Molitor, A. Costes, 1924* (ただし、1949年刊行の重版) であると思われる。なお、この仏訳は底本が明示されていない。以降、このモリトル訳コスト社版を略号V.F.-Cによって表記する。グーが引用している箇所を本稿で引く場合はV.F.-Cから訳出する。引用箇所の表記は、MEW版(Karl

Marx, *Das Kapital*, Erster band, Karl Marx-Friedrich Engels Werke, Band 23, Dietz, 1962) とそれに対応する邦訳『全集』版(『マルクス＝エンゲルス全集』第23巻[a, b二分冊]、岡崎次郎訳、大月書店、1965年)、およびV.F.-Cの該当箇所を併記する。

(6) Jean-Joseph Goux, « Marx et l'inscription du travail », *T. Q.* 33, p. 77; *T. E.*, p. 188.

類似に基づく言葉遊びに快を感じるのは、意味伝達のための言語の使用以前に享樂の対象としての言語の位相があることを指し示している⁽⁷⁾。

もうひとつ使用価値の側面は、生産に関わる使用価値である。そして、グーのホモロジーのシェーマにおいてとりわけ重要になるのはこの第二の使用価値である。純粋な消費にかかわる使用価値が快楽のための消費へと直接的、直線的な途を進むのに対して、生産にかかわる使用価値は、即時的な快楽のために興じられる途を「迂回し」、遅延化された途を行く。ある種の商品、製造機械、労働対象(原料)、労働力は、単純な消費の対象としてではなく、生産過程で用いられ、新しい別の商品の生産に資する使用価値をもつ。これと同様に「記号(記号の総体、あるいは記号の部分)は別の記号(別の記号の組み合わせ)を生産する手段となる」⁽⁸⁾。生産手段として記号の使用については、記号の組み合わせによって「生産的」な演算を行う数学や論理学、そして「生産的エクリチュール」としての詩の言語がそのモデルとして提示されている。生産手段としての商品と論理学や詩のエクリチュールは、迂回を伴う生産に関わる使用価値をもつ点で相似形をなすとされるのだ。

1-2. 差延としての生産、具体的労働 – エクリチュール、抽象的労働 – ^{アルシ}原エクリチュール

グーの粹組みのなかでは、使用価値と同様に、その源泉となる具体的労働——あるいは端的に労働それ自体——もまた迂回と生産という観点から捉えられる。マルクスの具体的労働は、デリダの『グラマトロジーについて』(以下『グラマトロジー』)の語彙を用いて「エクリチュール」、「痕跡」として書き換えられる。そして、具体的労働(労働)とエクリチュールあるいは痕跡との連関は、迂回、生産、そして「差延[différance]」といった主題系によって支えられている。

ここでデリダの文脈に基づき、「差延」という戦略素について概観しておこう。グーも参照しているが、『グラマトロジー』において、「差延」は「遅延する=差異化する[différer]の二重の意味」⁽⁹⁾を帯びるものとして位置づけられている。この二重性については、同時代のテキスト「差延」⁽¹⁰⁾のなかでより踏み込んで論及されている。そのなかで、デリダは、「差

(7) Sigmund Freud, *Der Witz und seine Beziehung zum Unbewussten* [1905], *Gesammelte Werke*, VI, S. Fischer, 1987, p. 140-141 (ジークムント・フロイト「機知 その無意識との関係」『フロイト全集』第8巻、中岡成文訳、岩波書店、2008年、150頁)。

(8) Jean-Joseph Goux, « Marx et l'inscription du travail », *T. Q.* 33, p. 77; *T. E.*, p. 189.

(9) Jacques Derrida, *De la grammatologie*, Minuit,

1967, p. 38 (ジャック・デリダ『根源の彼方にグラマトロジーについて』[上、下巻]上巻、足立和浩訳、現代思潮社、1972年、54頁)。

(10) Jacques Derrida, « La différance », conférence prononcée à la Société française de philosophie, le 27 janvier 1968, publiée simultanément dans *le Bulletin de la société française de philosophie* (juillet-septembre 1968) et dans *Théorie d'ensemble* (coll. Tel Quel, Seuil, 1968), et reprise dans

異[différence]」の「e」を「a」に書き換えてつくられたこの「差延[différance]」という戦略素を、ラテン語 differre とフランス語 différer 両者に認められる二つの語義系の錯綜として捉えようとする。ひとつ目のセリーは「経済的計算をはらむ操作、つまり迂回、遅延、停滞、保留、代表象をはらむ操作」、レゼルヴ ルプレザンタシオン「そのような操作に際して認められる延期する行為、時間やもろもろの力を斟酌する行為、それらについての計算を行う行為」⁽¹¹⁾であり、デリダはこれを「時間かせぎ=遅延化[temporisation]」という一語でまとめあげる。もうひとつは「同一でないこと、他であること、区別しうることといった意味」につらなる。この意味では、「差延」は、「衝突[différends]」を孕む「異なるものたち[différents]」のあいだで、「活動的に、力動的に、そしてある執拗さで続行される反覆のうちに、隔たり、距離、空間化=間隔化[espacement]が生じる」⁽¹²⁾場と位置づけられる。このように、デリダにとって「差延」とは「時間かせぎ=遅延化」であり「空間化=間隔化」であるような作用（の場）として構想されている。そしてもちろん、「差延」はその語の成り立ちからいって、エクリチュールの「作用=戯れ[jeu]」の別名でもある。[di-fe-řa:s]という言葉音のなかでは différence と différance の書記上の差異は聞き取れない。その差異は話し言葉における発話と聴取のあいだの直接性・即時性を迂回し、遅れてやってくるエクリチュールのなかでのみ読まれる。したがって、différance と書く行為自体が、差延化するエクリチュールの作用を実演していると言える。

一方、グーは「差延」を以下のような箇所アクセントを置いて捉えようとする。

差延と書かれるもの、それは、したがって、単に能動性ではないようなものによってそうした諸差異、そうした差異効果を「生産する」戯れ運動であろう。⁽¹³⁾

差延、すなわち、語の二重の意味において、差延化することの生産[la production du différer]を指し示す経済的概念 [...] ⁽¹⁴⁾

すなわち、グーがデリダから引き出すのは「生産[production]」の動態において現れる「差延」

Marges de la philosophie (Seuil, 1973). 引用は *Marges de la philosophie* により、同書と邦訳(ジャック・デリダ「差延」『哲学の余白』上巻、高橋充昭・藤本一勇訳、法政大学出版局、2007年)の該当箇所を併記する。

(11) *Ibid.*, p. 8 (同上、42頁)。

(12) *Ibid.*, (同上、同頁)。強調はデリダ。

(13) *Ibid.*, p. 12 (同上、48頁)。強調はデリダ。

(14) Jacques Derrida, *De la grammatologie*, op. cit., 1967, p. 38 (前掲邦訳、上巻、54頁)。

である。そしてグーは、この差延の生産、あるいは差延化による生産という問題系を、生産的な使用価値をもつ生産物(労働手段、労働対象、労働力)についてのマルクスの分析へと接ぎ木する。たとえば、労働力は、マルクスの言葉でいえば、「直接に生活手段」になることを避け、「回り道をして」「生産手段として」⁽¹⁵⁾生産過程で使用されることで、剰余価値という差異を生み出す。この意味で、グーの視座では、エクリチュールと同様に、商品の生産過程において発揮される労働もまた遅延化による生産として捉えられるのだ。

生産と差延の相同性について論じた節が「生産という迂回[Le détour de production]」と名づけられていることから分かるように、グーの論考では「迂回」という語が「差延」の同義語として使われている。グーは書いている。

労働手段と労働対象はその全体が迂回のなかに場を占めており、労働それ自体が迂回に基づいている。労働は迂回された使用[usage détourné]を代表象しており、生産手段はそれ自体で生産という迂回[détour de production]の道具なのだ。⁽¹⁶⁾

迂回をその核心とするものとして捉え直された生産および労働は、狭義の生産と労働——たとえばマルクスが相手にしていた19世紀の産業資本における工場生産と工場労働——を大きく超える含みをもつ。精神分析の言葉でいえば、享楽の直接的な対象として生産物を消費することは快感原則に基づくものであり、快楽を迂回して生産物を生産手段として消費することは現実原則に由来するものである。また生産は、直接的な快楽の迂回である点において、根本的に「貯蔵=保留[réserve]」、「蓄積[accumulation]」といった概念と相関したものとして捉えられる。

具体的労働は^{レゼルグ}痕跡、貯蔵=保留、差延である。あらゆる労働は迂回なのだ。他方で、あらゆる享楽は近道だ。商品の差延のなかで貯蔵=保留されたものは労働へと注がれる。「しかしはじめは現前していたが後から差延のなかで保護され、延期され、保留されることになるような生などはない」。差延は生存の条件である。差延の運動は(すでにそこで)可能である快楽の繰り延べではなく、疑いえない死からの生産の戦略を介した逃避なのだ。⁽¹⁷⁾

(15) *Das Kapital*, MEW23, p. 49; 『全集』23-a, 47-48頁; V. F.-C, t. I, p. 3-4.

(16) Jean-Joseph Goux, « Marx et l'inscription du travail », *T. Q.* 33, p. 86; *T. E.*, p. 199. 強調はグー。

(17) *Ibid.*, *T. Q.* 33, p. 86; *T. E.*, p. 200. 引用の地の文の強調はグー。なお、文中のデリダからの引用の出

典は以下。Jacques Derrida, « Freud et la scène de l'écriture », *L'écriture et la différence*, Seuil, 1967, p. 302 (ジャック・デリダ「フロイトとエクリチュールの舞台」『エクリチュールと差異〈新訳〉』合田正人・谷口博史訳、法政学出版局、2013年、411頁)。デリダからの引用文中の強調はデリダ。

具体的労働、すなわち生産運動(痕跡、差延、貯蔵^{レゼルヴ}=保留)はまさにあのエクリチュールの力、「ある形式の暴力的な書き込み、自然ないし素材——これらはエクリチュールとの〔したがって具体的労働との〕対比[・]のなかでのみそれとして思考可能となる——のなかへの差異の跡づけ」である。「労働はまず第一に人間と自然のあいだに生じる行為である」とマルクスは書いている。労働対象は「労働によって行使されたなんらかの修正を被った後に」原料[・]=最初[・]の素材[・][*matière première*]となる。しかも、人間は「この運動のなかで外部の自然に働きかけ、変化させると同時に、人間自身の本性を変化させる」のだ。⁽¹⁸⁾

このようにグーはデリダとマルクスのテキストを交互に織り合わせながら、「具体的労働」と「エクリチュール」が、差延あるいは迂回としての生産において作用する力であることを示す。またそれらは、生産・貯蔵の迂回路へと足を踏み入れた人間にとっての生存の条件であり、人間と自然のあいだに介在し、両者の差異と関係を根本的に規定するものと位置づけられる。グーのホモロジーでは、マルクスの労働とデリダの痕跡・エクリチュールはともに、人間と自然の対立関係を開き、人間の本性を根底から書き換える——あるいは人間の人間性を創始する——運動として把握されるのだ。

グーの図式では、「差延」の力動を示すものとしてエクリチュールと生産・労働が相似的に描かれるが、「迂回」という運動の形象を重視しているところからも見てとれるように、ここでの「差延」は、デリダがこの語に仮託した二つの語義系のうちの第一のもの、すなわち「^{タンボリザシオン}時間かせぎ=遅延化」のセリーにアクセントを置いて解されている。もう一方の「^{エスパスマン}空間化=間隔化」が文字通り差延の空間的含意を伝えたとすれば、グーの文脈での「^{タンボリザシオン}時間かせぎ=遅延化」としての差延には遅れ、延期、迂回、保留といった時間的含意が強く出ていると言えよう。

労働とエクリチュールの相同性を浮き上がらせるもうひとつの観点は価値(意味)の「起源」という観点である。マルクスにとって起源の問題は労働価値説というかたちをとる。価値の起源を労働に求める発想はアダム・スミスやデヴィッド・リカードらの古典派経済学に由来する。マルクスは『資本論』において、基本的に古典派経済学の労働価値説を継承しつつ、

(18) Jean-Joseph Goux, « Marx et l'inscription du travail », *T. Q.* 33, p. 87; *T. E.*, p. 201. 文中で引用されているデリダとマルクスの出典は以下の通り。Jacques Derrida, « Freud et la scène de l'écriture », art. cit., p. 317 (前掲邦訳、432頁)。*Das Kapital*, MEW23, p. 192; 『全集』23-a、234頁;

V. F.-C, t. II, p. 3-4. なお、引用の地の文の強調はグー。デリダからの引用文中の強調はデリダ。〔 〕で括った部分はグーによる加筆。

商品の価値はその商品の生産に社会的に必要とされる労働時間によって計られる、という立場をとる。また、マルクスにおいて価値の起源としての労働は「具体的労働」ではなく、「抽象的労働」として捉えられる。そして、この抽象的労働の量である「労働時間」が商品の価値の「尺度」となる。他方、デリダにおいても「痕跡とは、現れと意味作用を開く差延である」⁽¹⁹⁾とされるように、痕跡あるいはエクリチュールは意味作用の起源についての問いへとつながる主題であった⁽²⁰⁾。とりわけ、それらが「原痕跡[archi-trace]」「原エクリチュール[archi-écriture]」という名で提示されるとき、意味作用とその体系の根底にあるものか思考されている。デリダは「原エクリチュール」について書いている。

[...]差延の運動であり、還元不可能な原総合である原エクリチュールは、唯一で同一の可能性のなかで、時間化、他者への関係、言語活動といったものを同時に開くが、あらゆる言語システムの条件であるかぎり、言語システムそれ自体に属することはなく、その領野のなかにひとつの対象として位置づけることもできない。⁽²¹⁾

ここでデリダが言う「原エクリチュール」は、システム自体には属さないがシステムの可能性の条件をなす根本的な分節化の作動——差延であり原総合——としてある。

グーは、価値－意味の起源という観点を立てることで、抽象的労働（労働時間）と原エクリチュール（原痕跡）とを相通じるものとしてつかみとる。抽象的労働と原エクリチュールは、価値－意味の起源または共通の尺度であり、価値システム－言語体系の可能性の条件であるという点で、相似形をなすものとされるのだ⁽²²⁾。

1-3. 一般的等価物、金－パロール

ただし、この価値－意味の源泉でありシステムの可能性の条件である生産－差延の作動は

(19) Jacques Derrida, *De la grammatologie*, op. cit., p. 95 (前掲邦訳、上巻、128頁)。強調はデリダ。

(20) しかし、デリダの脱構築のプログラムは、痕跡を意味の「起源」と位置づける思考にとどまるものではなく、むしろ、どこかに——意識の現前性であれ、ロゴスとしての音声言語であれ——意味の「起源」を求めるような思考の伝統を掘り崩すことに向けられている。したがって、先ほど引用した一節（註(19)）の直前には次のような留保が付される。「実際、痕跡は意味一般の絶対的起源である、ということは、もう一度言うが、意味一般の絶対的根源は存在しないということだ」

(Jacques Derrida, *De la grammatologie*, op. cit., p. 95 (前掲邦訳、上巻、128頁)、強調はデリダ)。

これに対して、マルクスは躊躇も留保もなく、抽象的労働を価値の起源として指定している。グーにおいて、このマルクスとデリダの「起源」に対する態度の差異は顧みられていない。

(21) Jacques Derrida, *De la grammatologie*, op. cit., p. 88 (前掲邦訳、上巻、120-121頁)。

(22) Jean-Joseph Goux, « Marx et l'inscription du travail », *T. Q.* 33, p. 84; *T. E.*, p. 197.

当のシステムのなかでは明白な形で現れることはない。労働とエクリチュールは隠蔽され、搾取される。逆からいえば、経済と言語どちらの領域においても、労働－エクリチュールの隠蔽と搾取こそが価値－意味の体系が成立するための必要不可欠な要件となる。この隠蔽と搾取の機制がゲーのホモロジーの次なる主題となる。

ゲーの議論では、価値－意味がその起源において労働－エクリチュールに基づいているにもかかわらず、その源泉たる抽象的労働－原エクリチュールは掩蔽され、結果物たる価値－意味が優位を占める体制が生み出されるとされる⁽²³⁾。労働の生産性の抹消、エクリチュールの力の隠蔽は、その裏面として、交換価値あるいは意味の前景化とその地位の上昇を帰結するというわけだ。したがって、価値－意味の起源たる労働－エクリチュールの運動を覆い隠すメカニズムは、商品が交換価値として現れる交換・流通の局面において——言語に関しても、異なる言語間の翻訳の局面において——前景化する。

(言語の)交換の領域へとエクリチュールを隷属させること——エクリチュールの活動の有効性と現実が属するのは生産であり、使用(生産的エクリチュール、すなわち「詩」、数学、科学)なのだが——、それは、商品の語らいの輝きによって、この語らいを可能にし、維持する労働＝作用[*travail*] (あるいは戯れ＝働き[*jeu*])を隠蔽することである。⁽²⁴⁾

ゲーの枠組みにおいて、相異なる諸商品(諸記号)を価値(意味)という共通の尺度に還元し、交換可能なものへと一元化する価値システムは、流通に対する生産の従属、価値－意味による労働－エクリチュールの支配として把握される。

他方、この価値システムの形成に目を移すならば、その過程は「一般的等価物」の生成過程として現れる。価値は異なる商品の交換可能性、多様な記号の翻訳可能性を担保する尺度であるが、この商品の価値に基づく交換が社会の全域で全面的になされるためには、一般的等価物すなわち貨幣がその交換過程を独占的に媒介することが必要となる。この点で、ゲーは——とりわけ「労働の書き込み」の後に書かれる「古銭学」において展開されるが——『資本論』における価値形態論に対し、一般的等価物の生成の歴史を跡づけた理論として評価し、「価値の科学の基礎」⁽²⁵⁾としての範例的地位を与えることになる。「労働の書き込み」においても、一般的等価物の生成への注目は窺える。価値形態論において抽象的に再構築されるの

(23) *Ibid.*, T. Q.33, p. 89; T. E., p. 204.

(24) *Ibid.*, T. Q.33, p. 90; T. E., p. 205. 強調はゲー。

(25) Jean-Joseph Goux, « Numismatiques (I) »,

Tel Quel, n° 35, Seuil, 1968, p. 67. 強調はグー。

ー。

は一商品が一般的等価物となる段階的な過程である。商品の価値表現の変遷における端緒は、ある商品Xの価値が別の商品Yで表現される単純な価値形態(形態A)としてモデル化される。つづいて、単純な価値形態が積み重なることによって、商品Xの価値が他の様々な商品によって表現される展開された価値形態(形態B)が生じる。そして、形態Bでの価値表現の乱立は、表現するものと表現されるものの反転によって中心化され、「他のすべての商品が自らの価値を同じ等価物で表現する」⁽²⁶⁾ 一般的価値形態(形態C)が形成される。この形態Cでは、「自然形態を備えた特別なこの商品[一般的等価物となる商品—引用者註]は、社会のなかで次第に貨幣商品になる、あるいは貨幣として機能するようになる」⁽²⁷⁾。そして、最終段階では「直接的で普遍的な交換可能性の形態、すなわち一般的等価形態が、社会的習慣によって商品金の特殊な自然形態と一体化する」⁽²⁸⁾ ことをもって貨幣形態(形態D)へと至る。こうした弁証法的な展開のなかで、金という一商品が貨幣として他の諸商品の価値を表現し、交換を媒介する価値システム(商品世界)が成立する。

ところで、このような貨幣を媒介とする価値システムの生成において作動しているのは、生産の論理ではなく流通の論理である。貨幣が媒介するのは労働や生産ではなく、市場における交換と流通だからだ。したがって、グーにとって、貨幣形態によって中心化される価値システムとしての商品世界は、流通が生産に対して優位を占める体制として位置づけられる。

マルクスが描く価値形態の変遷のなかで一般的等価物の地位を占めるに至る商品、すなわち金は、それ自体労働生産物であり、その点で他の商品と変わるところはない。金という商品が一般的等価形態を占めるのは(さらには貨幣形態をとるのは)、他の商品が社会的に一致してその商品によって価値を表現することの結果である。つまり、「貨幣形態とは他のすべての商品の諸関係がある特殊な商品に結びついた反映にすぎない」⁽²⁹⁾。マルクス—グーの立場では、貨幣形態が形成された後も、価値の源泉が労働であり生産であることに変わりはない。ところが、ひとたび価値システムが成立し、貨幣を媒介とした商品の流通が回り始めると、諸商品の来歴、その使用価値、その起源としての労働は覆い隠される。市場においては、交換価値の量的比率だけが商品を計る尺度となるからだ。このように、グーの文脈では、労働を隠蔽する流通と一般的等価物が支配する価値システムの機制を批判的に描き出すものとして『資本論』は読まれる。

グーはここでもまた同じ手つきで、価値システムにおける労働の隠蔽という政治経済学批判の主題を、デリダの問題系へと移し換える。そこで強調されるのは、商品金とパロールの一般

(26) *Das Kapital*, MEW23, p. 80; 『全集』23-a, 90頁; (28) *Das Kapital*, MEW23, p. 84; 『全集』23-a, 95頁; V.F.-C, t. I, p. 48. V.F.-C, t. I, p. 53.

(27) *Das Kapital*, MEW23, p. 83; 『全集』23-a, 94頁; (29) *Das Kapital*, MEW23, p. 105; 『全集』23-a, 120頁; V.F.-C, t. I, p. 52. V.F.-C, t. I, p. 82.

的等価物としての相同性である。「直接的で普遍的な交換可能性の形態」、「一般的等価物」としての商品金の地位は、パロール（話し言葉）^{ランガー・ジュ・パルレ}が他の諸記号・諸事物に対して占める地位と同じ合っているとされる。パロール（言語記号としての話し言葉）は、他の記号（エクリチュール、身ぶり、シグナル、図画、症状）——あるいは、端的に他の事物——に対して意味を付す権能を有するという点で特権的な記号としてある。『グラマトロジー』の文脈では、とりわけパロールのエクリチュールに対する優位と、それと相関する「エクリチュールの貶斥[abaissement de l'écriture]」⁽³⁰⁾が主題化されていた。また、そのような音声中心主義のシステムが——たとえばソシール言語学のラングに見られるように——エクリチュールの力動の忘却のもとで作動していること、そのシステムが成立の根拠として差延作用をもたらす原エクリチュールの契機^{アルシ}を隠しもっていることが標記されていた。グーは、こうした『グラマトロジー』の議論を下書きに、他の諸記号に対して優位を占めるパロールを、諸商品に対して一般的等価物として機能する貨幣（金）の境位に対応するものとして位置づける。したがって、グーの帰結はこうなる。

あらゆる面で相同性は完全なものであるだろう。というのも、パロール（あるいは書記法）がこの原エクリチュールの消去の上に（「痕跡の隠蔽された運動を介して」）構成されるのと同様、抽象的労働とは、商品の価値の基礎をなしていながら貨幣的エクリチュールによって消去される原エクリチュール（抽象的痕跡）であると考えられる。⁽³¹⁾

このようにして、グーは『資本論』と『グラマトロジー』を往復しながら、一般的等価物としての金とパロール、価値システムのなかで隠蔽される起源としての労働（抽象的労働）とエクリチュール（原エクリチュール）というアナロジーを浮かびあがらせる。

1-4. 流通の理論としての記号学

このように、グーの議論では、差延としての生産の原理と市場における流通の原理が対極的に位置づけられている。そこでは、生産はいわば隠された深層であり、流通は深層の隠蔽の上に築かれる偽りの表層と見做される。流通は深層としての生産と労働を不可視化するためのイデオロギー的遮蔽幕を必要とする。グーの枠組みでは、ソシールの「^{シーニユ}記号」概念が流通イデオロギーの典型例として批判的に分析される。グーは、ソシールの「記号」をマ

(30) Jacques Derrida, *De la grammatologie*, op. cit., p. 11-12 (前掲邦訳、上巻、16頁)。

(31) Jean-Joseph Goux, « Marx et l'inscription du travail », *T. Q.* 33, p. 84; *T. E.*, p. 198.

ルクスが規定する「商品」とのホモロジーのなかで捉える。

したがって使用価値／交換価値の差異は、シニフィアン／シニフィエの差異と同様、隠蔽の原理である(そして隠蔽の根源にある)。商品がわれわれのまえに「使用価値と交換価値という二重の側面をもつ何か」としてあらわれることと、記号が二重の側面をもつ現実として出現することとは異なる二つの現象ではない。商品形態が労働を覆い隠し、自らを生み出す労働に命令を下すのと同様に、記号概念によって談話的言語[*langage discursif*]はそれを可能にする「エクリチュールの作用＝労働」を隠蔽するのだ。⁽³²⁾

ソシュールの「記号」はシニフィアン／シニフィエというかたちで、マルクスの「商品」は使用価値／交換価値というかたちで、どちらも「二重の側面」をもつという点で共通している。のみならず、両者の二重体として性格は、いずれも「隠蔽の原理」に淵源しているという点でも軌を一にする。ここでグーは、記号学の構想のなかでソシュールが手を染める「隠蔽」を明らかにするために、マルクスの貨幣についての論説——ある種の貨幣観に対する批判——を援用する。

マルクスは、価値形態(商品の価値を表現する関係)の単純な段階からより高次の段階への発展の後に、「直接的で普遍的な交換可能性の形態」をとる一般的等価値形態の成立とその機能の金への固定化(「貨幣形態」の成立)を説いていた。さらにマルクスは、この貨幣形態の成立の先に、価値と貨幣に関する認識の変化を見通す。すなわち、貨幣(金)は「ある社会的労働がそこに結晶化した生産物である限りでのみ価値をもつ」⁽³³⁾という認識が後退し、貨幣は「単なる記号」にすぎないという謬見が支配的になる。

特定の生産様式に基づいて物が帯びる社会的性格あるいは労働の社会的規定が帯びる物質的性格を単なる記号とみなすならば、同時にそれらを人間の頭脳による恣意的な産物にすぎないと表明することになる。⁽³⁴⁾

ここでマルクスが批判しているのは、特定の政治的・法的枠組みのなかで恣意的に定められる貨幣を商品の価値の尺度と考える貨幣観である。このような貨幣観が批判されるのは、そこでは商品の価値がその起源にあるはずの生産・労働から切り離されて観念されているからだ。

(32) *Ibid.*, *T. Q.* 33, p. 88-89; *T. E.*, p. 203.

(33) *Ibid.*, *T. Q.* 33, p. 81; *T. E.*, p. 193. 強調はグー。

(34) *Das Kapital*, *MEW* 23, p. 106; 『全集』23-a, 121頁;

V. F.-C., t. I, p. 83-84. なお、引用した文の直前に付された註では貨幣を記号としてとらえる思

想の系譜が概観されている。Cf. *Das Kapital*, *MEW* 23, p. 105-106, Note 47; 『全集』23-a, 122頁、註47; *V. F.-C.*, t. I, p. 83, Note (1).

グーは、商品の価値を恣意的な記号としての貨幣——マルクスの労働価値説の立場では貨幣(金)は生産物であり、同時に商品であるので、単なる恣意的な記号ではありえない——へと短絡的に結びつけるこうした発想を、「貨幣イデオロギー」[idéologie monétaire]⁽³⁵⁾と呼び、生産に対する流通の優位を示す徴候として捉える。そして、グーはソシュールの記号概念のなかにも「貨幣イデオロギー」の影を見る。

したがって、金属銀を観念的な価値の「単なる記号」と見做すことと、シニフィアン(その物質的な面は二次的だとされる)をシニフィエと向かい合わせにすることとが、いずれも同じイデオロギー的態度のうちにあることは明白である。どちらの場合も、生産物しかないこと、そして生産的労働を介することなくして意味(価値)はないことが覆い隠されている。再度明記しておけば、貨幣と(貨幣を一般的等価物とするところの)他の商品を区別すること、そして貨幣を生産-外[hors-production]のフェティッシュにする振る舞いは、パロールと他の諸記号とを区別し、パロールをなんらかの社会的諸記号の総体から切り離し、そのことによって社会的諸記号を記号の体系に外在するものとして(指示対象として)遇する振る舞いと相同的なのである。⁽³⁶⁾

グーによる批判を敷衍するならばこうなるだろう。シニフィエ(概念)とシニフィアン(聴覚映像)を無媒介的、排他的に結合させたものとして言語記号の概念を指定し、言語記号の体系としてのラングを共時的で示差的な体系として定めることによって、その体系は内的に充足し、外部から閉ざされる。それはまた同時に、記号とラングはそれらのよってきたる来歴、存立の条件を不問に付すことによってのみ思考可能となるということの意味する。言い換えれば、ソシュールの記号概念は、それが体系の外部ととりもつはずの諸々の関係、話し言葉以外の記号、とりわけエクリチュールとの関係⁽³⁷⁾、また指示対象との関係、さらには言語記号の「生産手段」⁽³⁸⁾との関係、こういった諸関係を捨象することを前提としているということだ。このように解釈されたソシュールの記号概念は、グーの経済-言語のホモロジーの枠組みのなかでは、商品を使用価値と交換価値の結合として——すなわちつねに交換価値へと還元されうる

(35) Jean-Joseph Goux, « Marx et l'inscription du travail », *T. Q.* 33, p. 81; *T. E.*, p. 194.

(36) *Ibid.*, *T. Q.* 33, p. 81-82; *T. E.*, p. 194. 強調はグー。

(37) よく知られるように、ソシュールは『講義』のなかでラングを話し言葉の体系と規定する一方、エクリチュールはラングの「^{イマージュ}像」、「^{ルプレザンタシオン}代表象」にすぎないとして言語学の対象から除外している。Cf. Ferdinand de Saussure, *Cours de linguistique*

générale [1916], publié par Charles Bailly et Albert Séchehayé avec la collaboration de Albert Riedlinger, Payot, 1995, p. 45 (『一般言語学講義』小林英夫訳、岩波書店、1972年、40頁)。

(38) 『講義』では、記号に物質的な形を与える筆や鑿などの「生産手段」への無関心が表明されている。Cf. Ferdinand de Saussure, *Cours de linguistique générale*, op. cit., p. 165-166 (前掲邦訳、168頁)。

使用価値として——捉え、貨幣によって均質的にならされた市場という体系のなかでのみ商品の価値（交換価値）を考える流通優位の発想と相同的なものと思われる。記号と商品とともに、生産過程と生産関係を括弧に入れることによって定立される流通・交換の領域におけるイデオロギー的基礎単位として位置づけられるのだ⁽³⁹⁾。

そもそもグーにとっては、記号を構成する二側面であるシニフィエとシニフィアンをあいだの「恣意的」で「無動機な[immotivé]」結合という『講義』が掲げる記号の第一原理⁽⁴⁰⁾自体が問題含みなのだ。その原理は、シニフィエとシニフィアンの結合を自明なものとして不問に付すものであり、そのことによって、シニフィエとシニフィエをあいだに、あるいは異なる記号と記号をあいだにありえたはずの生産関係の契機を排除し、さらにはその排除自体を科学的原理の装いのもとに糊塗する挙措として手厳しい批判にさらされる。マルクスが、商品の価値を恣意的に定められた「単なる記号」としての貨幣（法定通貨）へと結びつける貨幣フェティシズムを労働の忘却として批判したように、グーはソシュールの記号概念の「恣意的」な成り立ちのうちに、記号における労働の契機あるいは生産関係を排除しようとする流通イデオロギーの作動を見ようとする。このようにして、グーはマルクスの労働価値説の立場から

(39) グーのテキストでは、記号と商品の相同性が繰り返し指摘されるが、その他にも記号を貨幣と対応づけようとしているふしも見受けられる。後者の場合、恣意性をその第一原理とするソシュールの記号が、「単なる記号」として恣意的定められた貨幣（法定通貨）に類比的なものとして捉えられる。記号と等置されるのが商品なのか貨幣なのかという点はグーの思考のなかでは決一的な問いとして考えられてはいない。商品と貨幣とともに市場で流通し、交換されるものであり、生産と労働を覆い隠す仮象として位置づけられている。ソシュールにおける記号と商品・貨幣のアナロジー、およびその類比から導かれる交換の優位と生産の隠蔽という論件は、グーのみならず当時のテル・ケル派の理論のなかでしばしば見受けられる。「労働の書き込み」とともに『理論集成』に収録されている論考「言語学とテキストの生産[Linguistique et production textuelle]」のなかでジャン＝ルイ・ボードリヤは、ソシュールがラングにおける語の価値を生産ではなく交換によって構成されるもの——ボードリヤの言葉でいえば、「生産なき生産物」——と考えていた証左として、次の『講義』の一節を引用している。「価値は以下の二点によってつね

に構成される。／1. その価値を測定されるべきものと交換することができる似ていないものによって。／2. その価値が問題になっているところのものと比較することができる似たものによって。／この二つの要素は価値の実在するためには必要不可欠である。かくして、五フラン通貨の価値を規定するためには次の二つのことが必要となる。1. 五フラン通貨を、たとえばパンのような異なるものの一定量と交換することができる。2. 五フラン通貨を、たとえば一フラン通貨のような同じシステムに属する似た価値[...]と比較することができる。同様に、ある語はそれとは似ていない何か、すなわち概念と交換できなければならない。さらに、同じ性質の何か、すなわち別の語と比較できなければならない。」(Cours, p.159-160 (前掲邦訳、161-162頁))。興味深いことに、ここでは、ソシュール自身が言語記号の価値を貨幣とのアナロジーによって説明している。

(40) Ferdinand de Saussure, *Cours de linguistique générale*, op. cit., p. 100-101 (前掲邦訳、98-99頁)。

なされる市場・流通批判を、ソシュールの記号概念に対する批判へと拡張するのだ。

なお、記号概念と経済的事象のアナロジーは後に見る柄谷の議論でもあらわれるが、このアナロジーはグーと柄谷の差異を測定するためのひとつの指標となるだろう。

1-5. マルクス主義化する『グラマトロジー』

以上見てきたように、大きな枠組みとして、マルクスとデリダを結ぶグーのシェーマは、生産と時間かせぎ＝^{タンポリザシオン}遅延化としての差延の類比的連結を軸として、そこから、具体的労働とエクリチュール（痕跡）、抽象的労働（労働時間）と原エクリチュール（原痕跡）、貨幣とパロール、といった一連のホモロジーのセリを導き出していた。要約すれば、それはマルクスとデリダを、生産－差延の統合理論として、そしてまた経済と言語両面における流通イデオロギー批判として結びつける試みと言えよう。

グーの議論は領域に拘束されない自由でアナログな発想ゆえにアクロバティックな印象を与えるが、価値の体系の根底に創始的な力の源泉としての労働を置いている点で、大枠では古典派経済学のドグマである労働価値説に従ったものになっている。また、その批判の矛先が流通過程における起源・源泉としての労働の価値への還元に向けられている点で、グーのマルクス読解は基本的には初期マルクスとりわけ『経済学・哲学草稿』に顕著に見られる疎外論の枠組みをベースにしたものと言える⁽⁴¹⁾。

(41) 若きマルクスの手になる『経済学・哲学草稿』は、肉体的欲求から解き放たれた自由な生産の観念を人間という類的存在の本質と規定し、その生産活動が産業社会において「疎外された労働」へと転じることを批判的に描出する。そこでは、私的財産や賃金といった経済学のカテゴリーは、労働者を生産物から、さらには自己と自然から切り離す「疎外された労働」の必然的な帰結として把握される。1965年に立て続けに出版された『マルクスのために』および『資本論を読む』において、アルチュセールが強調したのは、こうした青年マルクスが立つ地盤からの「認識論的切斷」において『資本論』を位置づけなければならないということであった。アルチュセールによれば、『経済学・哲学草稿』に見られる本質と疎外の構図は、ロック以来の人間主義的・経験主義のプロブレマティック——すなわち古典派経済学もヘーゲル左派もそのなかに内属する思考の磁場——によって強く規定されている (Louis Althusser, «Marxisme et Humanisme», *Pour Marx*, Maspero,

1965)。これに対して、『資本論』は、古典派経済学がそこに「地代」や「利潤」といった経験的に確認できる経済現象しか見出さなかった理論的・概念的な空所において「剰余価値」という新しい対象の概念を生み出し、経験主義イデオロギーを排した概念に基づく学へと政治経済学を刷新した——アルチュセールはエンゲルスを参照しつつ、このマルクスの剰余価値の意義をラヴォラジェによる酸素の発見が化学にもたらした革命に比している——と評価する (Louis Althusser, «L'objet du Capital», *Lire le Capital*, t. II, Maspero, 1965)。アルチュセールの枠組みでは、疎外や搾取という人間主義的な観念に訴えることなく、経済と歴史を構造としてつかむことを可能にした点に『資本論』の学的・理論的な値打ちがある。ここで、『資本論』の新しさがどこにあるのかという論点は脇に置くとしても、グーの「労働の書き込み」におけるマルクス理解が、いまだ本質（生産と労働）とその疎外（生産的労働の商品・貨幣への転化）という人間主義的・経験

さらには、具体的労働－エクリチュールの力能を価値－意味へと転換し、その転換の事実自体を隠蔽する体制は、古典的な階級対立の構図、資本家による労働者階級の搾取という構図によって政治的に潤色される。デリダが「充溢を夢見るパロールのもとでのエクリチュールの貶斥」⁽⁴²⁾、「ロゴス中心主義的抑止のシステム」⁽⁴³⁾と名指した抵抗すべき対象は、マルクス主義の名のもとで指弾される支配階級による労働者の搾取、剰余労働の詐取と同型のものとして捉えられる⁽⁴⁴⁾。こうして、グーは『グラマトロジー』が言語について展開したラディカリズムをマルクス主義のラディカリズムと等置するのだ。この点について、フィリップ・フォレストは、60年代末のテル・ケルにおいてデリダの『グラマトロジー』がもっていた重要性を指摘している⁽⁴⁵⁾。文学をテキストの外にある現実・意味・思想を表現するものと見做す表象的文学観に抗して、ソレルスを中心とするテル・ケル派が標榜したのは、「テキスト的エクリチュール[l'écriture textuelle]」、すなわち外的な準拠点を交えずテキスト内部におけるエクリチュールの意味産出の運動それ自体を文学の対象とする立場であった。まず第一に、テル・ケルがデリダの仕事を必要とした理由は、痕跡、迂回、横滑り、差異といったものを孕むエクリチュールの運動の相において言語と言語をめぐる思考を捉え直したデリダの『グラマトロジー』が、「テキスト的エクリチュール」というテル・ケルの文学的实践にとつて、格好の思想的裏づけを提示していたことがあげられるだろう。またそれに加えて、テル・ケル派による『グラマトロジー』とマルクス主義の接合という試みが彼らにもたらした政治的効果も看過できない。彼らの「テキスト的エクリチュール」の実践がいかに文学の営みを一変させるものだったとしても、そのラディカルさは文学の範疇にとどまる。文学的前衛としてのテル・ケルの立場を革命的前衛という政治的な立場へと転換させる操作として、『グラマトロジー』とマルクス主義の接合の試みがあった、とフォレストは指摘している⁽⁴⁶⁾。グーによるマルクスとデリダのホモロジー的な突き合わせもまた、文学的前衛というポジションの理

主義的カテゴリーのなかで思考しており、『資本論』を『経済学・哲学草稿』の水準へと引き戻すことでその新しさを見ようとしないうちに留まっている点は付言しておかなければならない。

(42) Jacques Derrida, *De la grammatologie*, op. cit., p. 104 (前掲邦訳、上巻、144頁)。

(43) Jacques Derrida, «Freud et la scène de l'écriture», art. cit., p. 294 (前掲邦訳、401頁)。

(44) たとえば以下のような一節にデリダのエクリチュール論を政治経済的コンテキストに置き直すグーの身ぶりが読み取れよう。「エクリチュールの特殊な使用価値についての無理解と交換の全般的透明性のなかでの掩蔽(エクリチュールの相

対的な格下げ)は、自由契約(交換の領域で履行される)の外見のもとで剰余労働の詐取が覆い隠される資本主義時代と対応している」(Jean-Joseph Goux, «Marx et l'inscription du travail», *T. Q.* 33, p. 93; *T. E.*, p. 210)。

(45) Cf. Philippe Forest, *Histoire de Tel Quel*, 1960-1982, Seuil, 1998。

(46) フォレストは、このテル・ケル派の身ぶりを「グラマトロジーのマルクス主義化[marxiser la grammatologie]と「マルクス主義のグラマトロジ化[grammatologiser le marxisme]という二重の操作として分析している(*Ibid.*, p. 313-317)。

論化と政治化というテル・ケルの思想戦略に強く規定されていると言わねばならない。

以上で追いかけてきたグーによるデリダのマルクスへの重ね合わせは、全体的に見て、既成のマルクス解釈をデリダの思想によってパラフレーズしたものという印象を与える。グーが試みたマルクスとデリダの遭遇は、マルクスを文学的ラディカリズムの文脈に置き入れ、同時にデリダのエクリチュール論をマルクス主義化するというテル・ケルの政治プログラムには適っているにせよ、『資本論』あるいは『グラマトロジー』の内在的な読解に新しい視座を開くものにはなっていないように思われる。

2. 柄谷行人における「マルクスとデリダ」

グーによる全面的なデリダの参照と比べたとき、柄谷行人のテキストがデリダ受容の形跡をそれほど目立ったかたちではとどめていないことは確かである。柄谷がマルクスを論じた主要なテキスト『マルクスその可能性の中心』⁽⁴⁷⁾、『トランスクリティーク』⁽⁴⁸⁾におけるデリダへの言及は、いずれも周辺的なものにとどまり、グーのようにデリダに対して論究対象としてマルクスと同等の地位が与えられているわけではない。それでも、柄谷はグーと同様に、経済と言語のアナロジーを用いて『資本論』を読もうとしており、その際に同じくデリダが参照されている。わけでも『グラマトロジー』は、柄谷が言語論的な『資本論』読解、特に価値形態論の読解を手がけるうえで重要な参照項になっていたと考えることができる。柄谷によるマルクス論は『群像』1974年4-9月号に連載された「マルクスその可能性の中心」を嚆矢とするが、この初出のマルクス論は4年後1978年に同名の単行本として刊行される際、大幅な改稿がほどこされている。柄谷は、イエール大学の日本科講師として渡米した1975年以來の知己であるポール・ド・マンについて書いた文章の中で、自身のマルクス論に触れている。柄谷は、イエール大学在職中に「マルクスその可能性の中心」の一部を自ら英訳し、ド・マンに読ませたエピソードを披瀝しながら、次のように述べている。

ただ、その時点では、私は自分の書いたものに耐えがたいほどに不満があった。私が試みたのは『資本論』を言語論的に読むことであったが、それが不十分であるという気がしたのだ。それはその間に、ド・マンの本やデリダの『グラマトロジー』を読んだせいでもある。⁽⁴⁹⁾

(47) 柄谷行人『マルクスその可能性の中心』（講談社、1978年）、講談社学術文庫、1990年。

(48) 柄谷行人『トランスクリティーク：カントとマルクス』（批評空間、2001年）定本柄谷行人集第三卷、岩波書店、2004年。

(49) 柄谷行人「ポール・ド・マンは何を隠したのか」（『思想』2013年7月号、岩波書店）、『現代思想』2014年1月臨時増刊号、青土社、81頁。

また、柄谷は別のところでは、イエール大学時代にド・マンの『盲目と明察[Blindness and Insight]』を読み、後にそこで言及されているデリダの著作を読むに至ったとも述懐している⁽⁵⁰⁾。したがって、75年から78年の改稿にいたる期間にデリダの『グラマトロジー』との接触があり、そのことが「『資本論』を言語論的に読む」という柄谷の試みを精錬する過程においてひとつの導きの糸となっていたと考えることができる⁽⁵¹⁾。

本章では、柄谷のマルクス読解の論点を整理しつつ、また柄谷の仕事と『グラマトロジー』を中心とするデリダの60年代末のエクリチュール論との関係に照準しながら、柄谷のマルクス論をグーとは対照的なかたちでマルクスとデリダの遭遇を図ったものとして位置づける⁽⁵²⁾。

(50) 同上、80-81頁；柄谷行人・鶴飼哲・浅田彰「[討議] re-mem-bering Jacques Derrida」『新潮』2005年2月号、151頁。

(51) 『トランスクリティーク』(2001年)では、マルクスを扱った第二部、第三章「価値形態と剰余価値」のなかに、「言語学的アプローチ」と題される節が設けられており、そのなかで『グラマトロジー』への言及がある。なお、柄谷は、デリダを追悼する浅田彰・鶴飼哲との鼎談のなかで、自らのトランスクリティークの試みを「デコンストラクションの徹底化」とであると表現している（「[討議] re-mem-bering Jacques Derrida」(前掲)、156頁）。本稿は、この柄谷の言葉を、脱構築を「マルクス主義の根本化」として位置づけるデリダの言明（本稿、註(1)）とともに真に受けとり、その含意を『資本論』読解というフィールドのなかで明らかにしようとする動機に発している。

(52) なお、本稿では詳述できないが、柄谷には『日本近代文学の起源』(1980年)、「エクリチュールとナショナリズム」(1992年)、「文字論」(1992年)など、近代日本の言文一致運動の問題をはじめとしたエクリチュールの歴史性・政治性について論じた論考があるが、これらの仕事においてもデリダの『グラマトロジー』への理論的な依拠が見られる。ただし、この文脈では柄谷は、デリダが「音声中心主義」をプラトン以来の西洋形而上学の伝統のなかに位置づけることに対して疑義を呈している。たとえば「エクリチュールとナショナリズム」のなかで柄谷は自らの立場とデリダの『グラマトロジー』の差異を次のように指摘する。「第一に、音声中心主義は、「西洋」に限定されない問題として考察され

ねばならない。第二に、日本の国学がそうであるように、それは近代のネーションの問題と切り離しえない。日本において、ナショナリズムの萌芽は、何よりも、漢字文化圏のなかで、表音的なエクリチュールを優位におく運動のなかにあらわれた。しかし、これは日本に特有の事態ではない。ネーションの形成においては、時差はあっても、世界的に、例外なく、こうした問題が生じているのである。したがって、日本の事例を歴史的に考察することは、多くの日本の学者がそれを日本のユニークさに還元しているのとは逆に、エクリチュールとネーションの問題をより普遍的な相において見ることになるだろう」（柄谷行人『ヒューモアとしての唯物論』（筑摩書房、1993年）講談社学術文庫、1999年、66頁）。ちなみに、この論文に対しては、1995年にカリフォルニア大学アーヴァイン校で開催された第二回「人文科学の言説に関する国際会議」においてデリダ本人がコメントを残している。デリダは、柄谷の批判に対して、『グラマトロジー』というテキスト自体が「ナショナリズム、帝国主義、〈ヨーロッパ中心主義〉といったものと原理的に […] 結びついたナショナリスティックなイデオロギーに対して、すでにして、政治的に批判的な」スタンスをとるものであるとし、彼自身は「音声中心主義」を「西洋」に固有なものに限定したことは一度もないと応じている。（Jacques Derrida, « Introduction to Kojin Karatani's "Nationalism and Ecriture" », Surface Vol. V.201.1(v.1.0A - 31/12/1995): <<http://www.pum.umontreal.ca/revues/surfaces/vol5/derrida.html>>）。

2-1. 労働価値説からの切断としての価値形態論

マルクスの経済思想は、しばしば古典派経済学(アダム・スミス、デヴィッド・リカード)の延長線上に位置づけられる。古典派経済学は、商品の価値についてのある規定、すなわち商品の価値は生産過程で商品に投下された労働量——あるいはその商品によって支配できる労働量——によって決まるとする労働価値説によって特徴づけられる。『資本論』冒頭の「商品」の章(第一巻第一篇第一章)における「ある使用価値の価値量を規定するものは、ただ、社会的に必要な労働の量、すなわち、その使用価値の生産に社会的に必要な労働時間だけである」⁽⁵³⁾といった件には、明らかに労働価値説の思考が現れている。柄谷のマルクス論のもっとも顕著な特徴の一つは、この古典派経済学における労働価値説との決定的な切断において『資本論』を読む点にある⁽⁵⁴⁾。『グレントリッセ』(1858-59年)から『資本論』第一巻(1867年)への移行にあたって導入された価値形態論(第一巻第一篇第一章第三節「価値形態または交換価値」)が古典派経済学からの切断を画している、と柄谷は見る。

古典派経済学の労働価値説では、生産に要する労働量によって商品の価値が決まるとされるのであるから、商品はそれ自体で富であり、商品の物質的身体は使用価値(効用)と交換価値を内在的に有するものと規定される。対して柄谷は、商品をそれ自体で価値物と見るこのような視点を転覆させるものとしてこそ価値形態論はある、と言う。マルクスは書いている。

商品は、その価値が商品の現物形態とは違った独特な現象形態、すなわち交換価値という現象形態をもつとき、そのあるがままのこのような二重物として現われるのであって、商品は、孤立的に考察されたのでは、この交換価値という形態をけっしてもたないのであり、つねにただ第二の異種の一商品にたいする価値関係または交換関係のなかでのみ、この形態をもつのである。⁽⁵⁵⁾

(53) *Das Kapital*, MEW23, p. 54; 『全集』23-a, 53頁。

(54) とりわけ、『マルクスその可能性の中心』(1978年)では、古典派経済学からの切断としての価値形態論の意義が強調されている。ただし、柄谷は後の『トランスクリティーク』(2001年)では、A・スミス、D・リカードのみならず、サミュエル・ペイリーのリカード批判という契機が、価値形態論の導入において重要であったという見方を示している。ペイリーは、投下労働をもって価値実体とするリカードの労働価値説を批判し、商品の価値を同時代の諸商品の体系から見ようとした。その意味で、ペイリーはもっぱら労働と生産から価値を考える古典派経済学の思考を

相対化する視座をもたらしたと言える。とはいえ、ペイリーは貨幣を軽視したという点では古典派経済学と選ぶところが無い。柄谷の『資本論』読解は大枠で、貨幣を中性的な媒介として捉える思考から離脱する契機として価値形態論を位置づける読み筋において一貫している。こういった事情に鑑み、本稿では論旨を見やすくするため、価値形態論の対抗軸として古典派経済学のみに注目する。ちなみに、柄谷と同様、『資本論』の価値形態論の成立におけるペイリーの役割の重要性を指摘するものとしては、廣松渉『資本論の哲学』(勁草書房、1987年)がある。

(55) *Das Kapital*, MEW23, p. 75; 『全集』23-a, 82頁。

この部分でマルクスは、他の生産物との関係の形式^{フォーム}=形態こそが使用価値・交換価値の二重性を生産物に与えるのだと言う。このような見方は、使用価値・交換価値の二重性を商品の内在的な属性と見た古典派経済学とは明らかに立場を異にする。柄谷は、こうした古典派経済学とのズレを孕むような箇所をマルクスの「可能性の中心」として見ることで、生産物を価値物とする関係性の形式としての価値形態の分析を労働価値説に対する批判として位置づける。

では、価値形態が規定する商品の関係性とはどのようなものか。価値形態論の第一の形態、価値形態A「単純な価値形態」は、以下の二つの商品の関係図式によって示される。

20 エレのリンネル = 1 着の上着 : すなわち 20 エレのリンネルは一着の上着に値する
(相対的価値形態) (等価形態)

この等式で示される形態A「単純な価値形態」は、「リンネルは自分の価値を上着で表わしており、上着はこの価値表現の材料として役だっている」⁽⁵⁶⁾ことを意味するとされる。さしあたり、価値形態とは、相対的価値形態(左辺)にある商品の価値を等価形態(右辺)にある商品によって表現する価値表現の関係と考えられる。柄谷は、これをソシュールの記号概念の道具立てによって解している。すなわち、相対的価値形態は「シニフィエ」、等価形態は「シニフィアン」であり、「これらの結合としての価値形態が記号^{シニニ}なのである」⁽⁵⁷⁾。しかし、柄谷は明言していないが、ここでの記号概念の導入は、記号と商品のあいだに、類似性よりもむしろ差異性を浮かびあがらせていることに注目しなければならない。ソシュールにおける記号はシニフィエとシニフィアンの不可分な結合体であった。グーは、このような相補的な二面性の結合としての記号概念を、使用価値／交換価値の二重体としての商品に重ね合わせた。そこでは、商品は記号と同様にそれ自体で充足したユニットとして——グーにとってそれは批判されるべき対象としてではあるが——観念されていた。これに対して、柄谷の論脈で問題となるのは、価値形態におけるシニフィエとシニフィアンが別々の生産物に割り当てられ、価値関係のなかで分立しているという事態である。だからこそ、『資本論』の次のような一節が重要となるのだ。

相対的価値形態と等価形態とは、互いに属しあい互いに制約しあっている不可分な契

(56) *Das Kapital*, MEW23, p. 63; 『全集』23-a, 65 頁。

(57) 柄谷行人『マルクスその可能性の中心』(前掲)、34 頁。

機であるが、同時にまた、同じ価値表現の、互いに排除しあう、または対立する両端、すなわち両極である。⁽⁵⁸⁾

ここに、柄谷が価値形態における「非対称性」と呼ぶもの、すなわち相対的価値形態と等価形態のあいだの非対称性がある。価値形態は、相対的価値形態(シニフィエ)と等価形態(シニフィアン)、商品形態と貨幣形態という対極的で非対称的な関係を二つの生産物に強いるのだ。

なお、グーの議論を扱うなかで見たように、価値形態論は最初の形態Aにはじまり、形態B「全体的または展開された価値形態」、形態C「一般的価値形態」、形態D「貨幣形態」という形態の発展——関係の拡大と一般的等価形態による中心化の過程——として書かれている。だが、柄谷は価値形態論の単純な形態から貨幣形態へという発展的な叙述を反転させ、貨幣形態が完成した商品世界からシンプルで根源的な価値形態へと遡行するマルクスのまなざしを見出す。そして、その遡行は歴史的なものではなく、超越論的な「形式」への遡行、すなわち「物を貨幣たらしめる形式、あるいは、物を商品たらしめる形式」⁽⁵⁹⁾への遡行であるとされる。また、別のところでは価値形態を「無意識」になぞらえているように⁽⁶⁰⁾、柄谷にとって形態Aに純化された形で示される価値形態は、貨幣形態によって中心化された商品世界では意識にのぼらない始原的な形式として捉えられる。したがって、柄谷の議論では、価値形態論はその発展過程よりもむしろ形態Aに集約的に示される価値形態、すなわち相対的価値形態と等価形態の関係が資本主義経済という「できあがった生体」の謎を解き明かす「細胞形態」として注目されることになる⁽⁶¹⁾。

2-2. 交換から見る価値形態

『資本論』第一巻第一篇「商品と貨幣」は、冒頭第一章「商品」のなかに価値形態論が置かれ、その後に第二章「交換過程」、第三章「貨幣または商品流通」が続く構成をとる。この叙述の展開を時間的あるいは理論的推移として見るならば、価値形態論で貨幣の生成が論じられ、しかる後にその貨幣を媒介とするシステムの具体的作動として、交換過程、流通過程が分析されるのだと考えられる。しかし柄谷はここでも『資本論』の叙述の順序(章立て)を反転し、逆向きに読む。すなわち、交換過程・流通過程の局面から価値形態の問題をあぶり出そうとするのだ。『探求I』で柄谷は、形態Aの相対的価値形態と等価形態の非対称性を、

(58) *Das Kapital*, MEW23, p. 63; 『全集』23-a、66頁。

(59) 柄谷行人『トランスクリティーク』(前掲)、312頁。

(60) 柄谷行人『マルクスその可能性の中心』(前掲)、85頁。

(61) とりわけ、「単純な価値形態」に重点が置かれるの

は『探求I』(1986年)においてである。そこでは、形態Aの「相対的価値形態－等価形態」の関係形式が『資本論』の内在的読解を超えて、「売る－買う」、「教える－学ぶ」といったコミュニケーションの非対称性の問題一般へと接続されている。

「売る」立場と「買う」立場の対極性として捉えている⁽⁶²⁾。それは、価値形態の非対称性の問題を次のような流過程論の言葉でパラフレーズすることを意味する。

W-G、商品の第一変態または売り。商品体から金体への商品価値の飛び移りは、[...]商品の命がけの飛躍 (Salto mortale) である。この飛躍に失敗すれば、商品にとっては痛くはないが、商品所持者にとってはたしかに痛い。⁽⁶³⁾

売る立場にとって、交換以前には、生産物が売れることにはいかなる自明性もない。ここに、等価交換の名目のもとで隠蔽されている買う立場と売る立場の非対称性が顕在化する。商品販売者(売り手)は貨幣を介さなければ商品を交換できないが、貨幣所持者(買い手)は他の商品との直接交換可能性をもつ、という立場の差異である。柄谷は売る立場(商品)と買う立場(貨幣)という異なる立場に立つものどうしの関係を、「相対的価値形態=等価形態」という価値形態のなかに見るのだ。

このように、柄谷の読みにおいては、価値形態論における形態Aの対極的なものの断絶を孕んだ結合は、商品形態／貨幣形態、使用価値／交換価値、シニフィエ／シニフィアン、売る立場／買う立場といった流過程に潜む非対称性の諸範疇を生成し、生産物を相互に関係づける原形式として捉えられる。

また、交換・流通の視角からは、価値形態論に散見される「価値の表現」という言葉遣いが問いに付される。リンネルの価値が上着で表現されると言うとき、それは表現されるべき同一性(一般の人間労働)の実体的な存在を含意している。その意味で、「価値の表現」という言い方は生産過程における投下労働によって商品それ自体に価値が結晶化しているとする古典派経済学的な価値実体論をひきずっている。他方、柄谷は、価値形態を「価値の表現」から引き離し、交換・流通におけるパフォーマンスな効果を跡づけるものとして捉え直す。すなわち、価値形態をすでにある同一性を表現する形式としてではなく、売りと買いという社会的行為の効果として同一性を事後的に生成する——あるいは、仮構する——関係形式としてつかみとるのだ。ここで注目されるのは「商品のフェティシユ的性格とその秘密」と題される節(第一巻第一篇第一章第四節)の次のような記述である。

(62)「貨幣を尺度または手段とみなす、したがって売ること=買うこととみなす古典経済学に対して、[マルクスは——引用者註] 商品の価値形態のなかに、けっして拭いさるることのできない対極性を、あるいは「売る」立場と「買う」立場の差異

をみいだすのである」(柄谷行人『探究Ⅰ』(講談社、1986年) 講談社学術文庫、1992年、115頁)。

(63) *Das Kapital*, MEW23, p. 120; 『全集』23-a, 141頁。

だから、人間が彼らの労働生産物を互いに価値として関係させるのは、これらの物が彼らにとっては一様な人間労働の単に物的な外皮として認められるからではない。逆である。彼らは、彼らの異種の諸生産物を互いに交換において価値として等置することによって、彼らのいろいろに違った労働を互いに人間労働として等置するのである。彼らはそれを知ってはいないが、しかし、それを行なうのである。⁽⁶⁴⁾

そして、柄谷はここに生産物の価値を交換の事後的な効果として見る視座を読みとる。

相異なる生産物が等置されるのは、それらが何らかの「共通の本質、(同質の労働)をふくんでいるからではない。実際にそれらが等置されたあとで、そのような共通の本質が想定されるにすぎない。⁽⁶⁵⁾

そもそも生産物と貨幣の交換が成立する以前に、その交換(相異なるものの等置)を保証するいかなる根拠も見出し得ない、と柄谷はいう。「いかなる生産物も売られ(貨幣と交換され)なければ「価値」でも「使用価値」でさえもない」⁽⁶⁶⁾のだから。柄谷は、商品「を」孤立的に考察する立場、商品それ自体を使用価値と交換価値の二重体として所与のものとする立場を否定し、交換という社会的行為における価値の事後的発生を対置するのだ。古典派経済学の労働価値説が商品の生産過程に価値の創出を見るのに対し、マルクス-柄谷による価値形態論は交換過程(流通)に価値の発生を位置づける。『資本論』の価値形態論が労働価値説に対する批判としてあるというのはこのような意味においてである。柄谷は価値形態論を、生産過程から切断し交換過程に引きつけて読むことにより、労働価値説とは根本的に異なる価値論へと铸なおすのだ。

2-3. ^{アルシ}原エクリチュールとしての価値形態

では、柄谷が捉える価値形態の問題はデリダの思想とどのように切り結ぶのか。糸口となるのは言語と経済のアナロジーである。先ほど引用した交換行為における価値の等置について触れた箇所の直後で、マルクスは価値形態について言語のアナロジーを用いて語っている。

(64) *Das Kapital*, MEW23, p.88; 『全集』23-a、99-100頁。

(65) 柄谷行人『探求I』(前掲)、62頁。強調は柄谷。

(66) 同上、126-127頁。

それゆえ、価値の額に^{ひたい}価値とはなんであるかが書かれてあるのではない。価値は、むしろ、それぞれの労働生産物を一つの社会的な象形文字にするのである。あとになって、人間は象形文字の意味を解いて彼ら自身の社会的な産物の秘密を探りだそうとする。なぜならば、使用対象の価値としての規定は、言語と同じように、人間の社会的な産物だからである。⁽⁶⁷⁾

一方、柄谷はこの「社会的な象形文字」に関する件を注釈するかたちで、次のように述べる。

このように、マルクスは商品形態を「社会的象形文字」——それはデリダ的にいえばアルシエクリチュールである——として見ている。マルクスがいわんとするのは、貨幣が二次的なものではないこと、商品形態にすでにそれが存するということである。⁽⁶⁸⁾

柄谷の文脈で解するならば、ここでの「社会的」という形容は、その効果として価値を身に帯びる商品形態——と同時に貨幣形態——を生み出す交換という行為の社会性を含意していると言える。そして、商品形態(あるいは価値形態)が「象形文字」に譬えられるのは、その価値の根源を読みとることが困難であることを意味すると考えられる。商品世界の日常的な意識にはその結果だけが映り、そのよってきたる根源と機制は隠される「社会的な象形文字」としての商品形態(価値形態)を、柄谷はデリダの^{アルシ}「原エクリチュール」と対応づける。

抽象的労働と原エクリチュールを等置したグーとの対照は鮮明である。グーは原エクリチュールの差延の運動を労働に、すなわち生産過程に置いていた。これに対して、柄谷は原エクリチュールを流過程、商品交換の過程に見出す。価値形態の要諦は、価値関係の両極である相対的価値形態(売る立場、シニフィエ)と等価形態(買う立場、シニフィアン)の非対称性を孕む結合——それが商品形態を現出させる条件であった——にあった。つまり、柄谷の論脈では価値形態は市場の流過程において商品が別の商品と関係するときの原形式なのである。

他方デリダは、パロール／エクリチュール(文字)、シニフィエ／シニフィアン、睿智的なもの／感性的なもの、といった思考の諸範疇によっては触知し得ず、むしろそのような範疇の分節化の可能性の条件をなすものとして「原エクリチュール」を提示していた。別言す

(67) *Das Kapital*, MEW23, p.88; 『全集』23-a, 100頁。

(68) 柄谷行人『トランスクリティーク』(前掲)、366頁。

れば、原エクリチュールとは、「形式の生成」⁽⁶⁹⁾としての差延であり、「意味作用の根源を形成するもの」⁽⁷⁰⁾としての「空間化=間隔化」^{エスバスマン}の別の名でもあった。とりわけ、原エクリチュールの「空間化=間隔化」^{エスバスマン}の作用については、ルソーの『言語起源論』を読み解く過程で次のように述べられていた。

空間化=間隔化は現前のなかにひとつの間隔[intervalle]を差し込む。この間隔はたんに声と歌の相異なる時代を分かっただけでなく、また代表象されるものを代表象するものから分かつ。⁽⁷¹⁾

この一節の「代表象されるもの」と「代表象するもの」を「相対的価値形態」と「等価形態」に入れ替えれば、そのまま柄谷による価値形態の定式が得られるだろう。このようなデリダ-柄谷の複合的視点からすると、日常的に観念される交換の媒介物としての貨幣は文字、それも表音文字であり、価値形態は貨幣と商品を分節化する根源的形式であるという意味で、「文字以前のエクリチュール」、すなわち「空間化=間隔化」^{エスバスマン}としての「原エクリチュール」に対応するものと解することができる。

2-4. 貨幣の嫌悪とエクリチュールの貶斥

柄谷のマルクス読解のなかでは、価値形態論のみならず、貨幣についての捉え方においても古典派経済学からの切断があるとされる。ここでも流通の観点が重要となる。

古典派経済学においては、商品の生産において投下された労働が価値の実体をなすと考えられる。そこから、商品はそれ自体で使用価値でありかつ交換価値であるという商品観が生じる。そして、この労働価値を実体化したものとしての商品観はただちに貨幣観へと投射される。それは、商品交換を媒介する二次的、派生的、中性的なものとして貨幣を見る立場である。たとえば、A・スミスは「交換価値」とは「購買力[the power of purchasing]」であるという⁽⁷²⁾。つまり、スミスによれば、商品自体に他の商品を買う力が内在しているのであり、本来的に商品は直接別の商品と交換しようと想定される。この商品観では、商品交換は物と物とを直接交換する生産物交換(物々交換、W-W)と本質的に変わらないものと見做される。このことと相関して、スミスの経済学においては、貨幣は商品交換を円滑にする「商業

(69) Jacques Derrida, *De la grammatologie*, op. cit., p. 92 (前掲邦訳、上巻、125頁)。

(70) *Ibid.*, p. 99 (同上、139頁)。

(71) *Ibid.*, p. 289 (前掲邦訳、下巻、121頁)。

(72) Adam Smith, *An inquiry into the nature and*

causes of the wealth of nations, the 5th edition, printed for A. Strahan, and T. Cadell, 1789, p. 30 (アダム・スミス『国富論』I、大河内一男・玉野井芳郎・田添京二・大河内暁男訳、中公文庫、1978年、49-50頁)。

用具」や「価値尺度」といった媒介物に過ぎないとされる。こうして、労働価値説に立つ商品観から、貨幣を中性的・中立的なものと思倣す立場、さらには貨幣を不純物として排斥しようとする貨幣嫌悪が導かれる。

『資本論』のマルクスはこのような労働価値説から出てくる貨幣観、中性的貨幣観をこそ批判したのだ、と柄谷は指摘する。この貨幣の中立性に対する批判の文脈において、柄谷のマルクス論はデリダの『グラマトロジー』と接点をもつ。実際、柄谷は『資本論』への言語論的アプローチにおいて、貨幣をエクリチュールとのアナロジーのなかで思考している。

マルクスがいうように、貨幣によって、売りと買いは空間的にも時間的にも分離する。貨幣をもつ者は、いつ、どこで何を、それで買ってもよい。このことを再び言語論的に見れば、貨幣は、音声言語に対する文字言語になぞらえられるだろう。書かれたテキストは、いつどこで誰に読まれるかわからない。音声でならその場の他者に了解可能であっても、書かれたものは違ったラングにおいて読まれてしまう。リカードあるいはブルードンの貨幣に対する嫌悪は、文字に対する嫌悪と類似する。それらはどちらも媒介的なコミュニケーションへの嫌悪である。したがって、そこから、直接的な透過的な交換が「想像」される。デリダが『グラマトロジーについて』で述べたように、プラトン以来の哲学は文字を嫌悪し、透明な直接的な交換＝コミュニケーションを想像してきたとするならば、それは経済においては貨幣に対する嫌悪としてあらわれるといってよい。しかし、プラトンの文字批判がすでに文字を前提していたように、古典経済学者が出発する物々交換あるいはロビンソン・クルーソー物語のような交換は、すでに暗黙に貨幣（一般的等価物）を前提しているのである。⁽⁷³⁾

リカードやブルードンは、価値を有するのは労働生産物のみであり、副次的な交換手段にすぎない貨幣は廃棄しようとする。柄谷は、この貨幣廃棄論のなかに、デリダが西洋の言語観の伝統に見た文字嫌悪、文字批判と同型の意味－価値の透明なコミュニケーション——その経済における対応物としての生産物交換（物々交換）——への志向、パロール（商品）への意味（価値）の現前という臆見を見てとる。そこでは、一方では価値の「単なる記号」としての貨幣が、他方では音声の代理としての表音文字が、いずれも意味－価値に対して派生的

(73) 柄谷行人『トランスクリティーク』（前掲）、365頁。

で外的な不純物として観念される。こうして、労働価値説の貨幣嫌悪を相手取るマルクスと、音声中心主義——それは音声における意味の現前を前提とする——における「エクリチュールの貶斥」に抗するデリダとが二重写しとなるのだ。このように、柄谷が『資本論』への「言語論的アプローチ」と呼ぶものは、とりわけ貨幣－文字のアナロジーが担う理論的重要性に鑑みれば、その内実において『資本論』のグラマトロジック（文字論的）な読解とでも形容したくなる性質を有している。では、貨幣－文字の中性化の言説に対する二重の批判はいかなるかたちでなされるのか。この問いに答えるためには、再度『資本論』に照準し、流通過程において貨幣が開く問題を検討しなければならない。

2-5. 流通における「あいだ」、「抑圧されたものの回帰」としての「恐慌」

流通過程の観点から顧みるならば、価値形態論は商品流通における局所的、限定的な場面を取り扱ったものであるといえる。ひとつの価値関係（たとえば、20 エレのリンネル＝2 オンスの金）は、相対的価値形態にあるリンネルの所持者にとって自分の商品の価値を金で置き換える過程すなわち売る過程（W－G）であり、反対に等価形態にある金の所持者から見れば自らの金を相手のリンネルに置き換える過程すなわち買う過程（G－W）となる。このように、価値形態論が扱う二つの商品の関係は、売り（W－G）あるいは同一の関係の反対過程である買い（G－W）に対応している。他方で、流通過程は際限のない交換の連鎖として現れる。もっとも短い流通過程のユニットを考えるならば、ある商品が貨幣を介して別の商品へと交換される過程、すなわち売りと買いが連結されたW－G－W（商品－貨幣－商品）を流通過程のモデルとすることができる。

ここで柄谷が重視するのは、交換の局面で見れば、流通過程（W－G－W）は売り（W－G）と買い（G－W）という分離した両極の結合として現れるという点である。それは『資本論』の次の一節に読まれる。

流通は生産物交換の時間的、場所的、個人的制限を破るのであるが、それは、まさに、生産物交換を交換のために引き渡すことと、それとひきかえに他人の労働生産物を受け取ることとの直接的同一性を、流通が売りと買いの対立に分裂させるということによってである。⁽⁷⁴⁾

(74) *Das Kapital*, MEW23, p. 127; 『全集』23-a、150頁。

この箇所について柄谷は、「マルクスがここでいう貨幣とはまさに文字である」⁽⁷⁵⁾と注釈する。すなわち、「話す」と「聞く」ことの「直接的同一性」は、文字において分裂させられる」と同様に、貨幣は流通において生産物交換(W-W、貨幣の媒介を経ない物々交換)の直接的同一性を破り、「売り」と「買い」を分裂させる。こうして、流通過程に休止点を穿つ文字としての貨幣は、労働価値説と音声中心主義の自明性を転覆する視座をもたらす。

それでは、流通における売りと買いの分裂は何を含意するのか。一方で、その裂け目は生産物交換の諸限界を突破することにより、資本蓄積(G-W-G')の可能性を開く。見やすい例でいえば、ある商品を安い市場で買い(G-W)、遠方の別の市場で高く売る(W-G')ことによって資本の蓄積を企てる商人資本は、まさに流通が「場所的、個人的制限を破る」ことによって可能になる。他方で、その分裂は買いから売りへの移行が休止する場を開くことで、「恐慌の可能性」を生み出す。恐慌とは「ひとびとが具体的なものとしての商品よりも一般的購買力としての貨幣を欲することによってひきおこされる経済全般にわたる過剰生産の状態」である⁽⁷⁶⁾。マルクスは、恐慌において「商品とその価値形態すなわち貨幣との対立は、絶対的な矛盾にまで高められる」⁽⁷⁷⁾と書いている。つまり、恐慌においては売り(W-G)の困難が前景化するのだ。商品は貨幣と交換されなくなり、人々は商品に背を向け貨幣の前で拝跪する。

柄谷の読解において、売りの困難性は、価値形態における相対的価値形態と等価形態の非対称的関係(売る立場と買う立場の非対称性)に淵源するとされた⁽⁷⁸⁾。したがって、柄谷の論脈では、経済全般にわたる売りの困難の前景化としての恐慌は、貨幣経済の意識には隠蔽されていた価値形態の回帰的到來として捉えられる。古典派経済学の思考では貨幣は商品の価値を表示し、交換を仲介する純粋な媒介物に過ぎなかった。それ自体で価値物である商品を前提とする古典派経済学の意識にとって、貨幣は副次的、中性的、透過的なものとどまる。商品こそ価値であり貨幣は商品交換の道具にすぎないのだから、人々が商品を捨て貨幣に走る恐慌とは正常な市場経済の作動からの逸脱であり、病理現象か倒錯としてしか見做されない。しかし、マルクスが生きた19世紀中葉のイギリス経済においては景気循環の一局面として周期的な恐慌が生起しはじめていた⁽⁷⁹⁾。マルクスは恐慌を例外事態または正常からの

(75) 柄谷行人『マルクスその可能性の中心』(前掲)、52頁。

(76) 岩井克人『貨幣論』(筑摩書房、1993年)ちくま学芸文庫、1998年、11頁。

(77) *Das Kapital*, MEW23, p.152; 『全集』23-a、180頁。

(78) 柄谷行人『探求I』(前掲)、128-129頁。

(79) 宇野弘藏は『恐慌論』のなかで、偶発的な原因による過大な投機によって生じる重商主義時代の恐慌と区別しつつ、18世紀後半-19世紀初め(産業革命期)の恐慌、およびマルクスが生きた1820年代以降の恐慌について以下のように記述している。「以上述べてきた時期につづく十八世

逸脱として切って捨てるのではなく、むしろ病理的な状況に身を置き、そこから貨幣の問題を問い直したのだ、と柄谷は言う。商品世界の意識にとって隠蔽されていた貨幣と価値形態は、恐慌において還元不可能なものとして顕現する。『トランスクリティーク』の柄谷は、恐慌が信用の過熱にともなって生じることを確認したうえで、次のように指摘する。

いいかえれば、恐慌は、資本が自らの「権限」以上に想像的な拡張を果たすときに生じるのである。カントは理性の越権行為を *spekulativ* と呼んで批判したが、恐慌 *crisis* は実際に、資本の投機的 *speculative* な拡張を批判する。いいかえれば、均衡的發展を想定していた古典経済学を批判する。その意味で、マルクスに『資本論』を書かせたのは、剰余価値理論（リカード左派がすでにそれを主張していた）ではなく、この資本主義の病的な症候としての恐慌である。マルクスは、いわば、精神分析的な遡行によって、それを、根本的に「価値形態」、いいかえれば、決して揚棄しえない非対称的な関係に見いだしたのである。⁽⁸⁰⁾

ここでは理性の越権行為に対する批判というカント的主題とのアナロジーにおいて恐慌が捉えられている。マルクスを価値形態へと向かわせたのは、現実の経済において生起してい

紀後半以後十九世紀初めにいたるいわゆる産業革命期にもしばしば恐慌現象の繰り返されるのを見るのであるが、そしてそれは漸次に再生産過程そのものに基礎を有する恐慌に転化しつつあるものといってもよいのであろうが、一方では資本主義的發展段階のいわば過渡期をなすとともに、他方ではアメリカの独立、フランスの革命、大陸戦争に伴うイギリスの特殊の事情に影響されるのであって、明確なる規定は与え得ない。一八一九年の戦後恐慌を最後として、イギリスはいわゆる景気循環の過程を周期的に繰り返すという典型的な形で示すことになるのである。／かくて十九世紀二十年代以後には、二五年、三六年、四七年、五七年、六六年とほとんど一様に十年内外の周期をもって恐慌が襲来している。もちろん、個別的にはそれぞれ特殊の事情によって決定されるのであるが、しかし恐慌はもはや偶然的なる現象とはいえない。いずれも一定期間の好況期の後にあらわれる極度の繁栄から急に恐慌状態に陥り、その後また一定期間の不況期を経て好況に転換するという過程を繰

り返すのである」（宇野弘藏『恐慌論』（岩波書店、1953年）岩波文庫、2010年、43-46頁）。

(80) 柄谷行人『トランスクリティーク』（前掲）、346頁。また、「恐慌」の問題は、78年のテキストにおいては次のように読まれる。「恐慌とはなにか。それは、価値の関係の体系が一瞬解体されることだ。物の内在的価値がそのとき消えてしまう。いいかえれば、恐慌は、貨幣形態がおおいかくしていた価値形態——象形文字——を露呈させる。人々は商品をみずてしまう。商品とは商品形態にほかならないのであり、物ではないのだ。物が眼前にありながら、彼らはそれをつかむことができない。ある種の失語症の患者が物を物として知覚しえないように。／恐慌は、貨幣形態がいかにして成立したかを逆に照射する。マルクスは、フロイトと同様に、資本制の「幼年期」に遡行したのであり、価値形態という「無意識」の世界に向かったのである」（柄谷行人『マルクスその可能性の中心』（前掲）、85頁）。

た「批判」としての恐慌であった、と柄谷は見るのだ。また別の箇所では柄谷は、精神分析のメタファーによって恐慌を記述している。

発展した産業資本主義経済においては、「粗野で素朴な形態」は抑圧されている。しかし、恐慌においては、まさに「抑圧されたものの回帰」がある。「健全な市場経済」はその前代の形式を否認するが、それ自身その上に立っているのだ。⁽⁸¹⁾

柄谷にとって、価値形態は商品の価値を自明視する古典派経済学の意識では抑圧されている無意識の形式である。だが、その無意識の形式はただ抑圧されたままにとどまるのではない。それは、恐慌というかたちをとって回帰する。この意味で、恐慌は「抑圧されたものの回帰」の「症候」として解釈されうるのだ。こうして柄谷は、恐慌という契機から古典派経済学の思考を問い直すマルクスの姿を描き出す。それは、貨幣を厄介払いしようとする古典派経済学の思考に対して、流過程の売り買いのあいだに反覆的に生起する恐慌という症候的な事態にとどまり、貨幣(価値形態)という抑圧されたものの回帰に目を凝らすマルクスである。

ここで再度、柄谷のマルクス論とデリダの原エクリチュールの思想との共鳴を見ることがができる。ここでの原エクリチュールの含意は、差延の二つの意味系のうちの第二の系、「空間化=間隔化」のセリーに照準したものであると言える。デリダは、『グラマトロジー』のなかで、ソシュールが『講義』で指摘するパロールとラングの関係について注釈しながら、その関係の根底に狭義のエクリチュール(表音文字)を越えたエクリチュールの運動を見ている。

ソシュールによれば、パロールの受動性はなによりそのラングとの関係である。受動性と差異のあいだの関係は、ラング・ジュの根本的無意識(ラングへの根づきとしての)と意味作用の起源をなす空間化=間隔化 [l'espace] (休止、空白、句読法、問一般など)のあいだの関係と別のものではない。「ラングは形式であり実体ではない」(p. 169)からこそ、逆説的ではあるが、パロールの能動性はつねにラングに基づくことができ、また基づかざるをえない。そして、ラングが形式であるのは、「ラングには差異しかない」(p. 166)からである。空間化=間隔化(この語が空間と時間の分節化を、時間の空間への生成 [devenir-espace] と空間の時間への生成 [devenir-

(81) 柄谷行人『トランスクリティーク』(前掲)、240頁。

temps]を意味することが明らかになるだろう)はつねに非知覚的なもの、非現前的なもの、そして非意識的なものである。空間化=間隔化がそのようなものとしてあるのは、その表現を非現象学的なかたちで使うかぎりでのことだ。空間化=間隔化としての原エクリチュールは、現前性の現象学的経験のなかではそのものとして与えられることはない。それは生きいきとした現在の現前性のなかに、あらゆる現前性の一般形式のなかに、死んだ時を刻み込む。死んだ時は作動している。⁽⁸²⁾

デリダは、ソシュールの「ラングには差異しかない」というテーゼを「空間化=間隔化としての原エクリチュール」の作動を印づけたものとして読みかえる。言い換えれば、ソシュールが静的な共時態として捉えた言語体系に、原エクリチュールの力動、すなわち空間化=間隔化という不可視の作用を見ようとする。能動的な話す行為がラングへの受動的・非意識的な関わりなしにはありえないと同様に、ラングという差異のシステムは不可避免的に、そして非現前的なかたちで、原エクリチュールの「空間と時間の分節化」の運動に根を張っている。

柄谷がマルクスに読むのも、差異のシステムの根底に空間化=間隔化を見るまなざし、「あいだ」へのまなざしであった。また、それは交換が生じる場へのまなざし、流通過程へのまなざしでもある。「商品交換は、共同体の果てるところで、共同体が他の共同体またはその成員と接触する点で、始まる」⁽⁸³⁾とマルクスは書いている。商品交換の生じる場は共同体と共同体の「あいだ」なのだ。柄谷は、この「あいだ」の問題をデリダの言葉によって解しているように思われる。『マルクスその可能性の中心』のなかで柄谷は書いている。

ソシュールがいうように、言語とは示差的な体系である。つまり、意味は、語(シニフィアン)と語(シニフィアン)との「間」に生じる。根源的な意味作用は、こうした「空=間」に生れるのだ。それは、ジャック・デリダのいい方でいえば、差延化(遅延化・差異化)にほかならない。時間および空間は、そこから生じる。⁽⁸⁴⁾

明示されていないが、ここでソシュールのラングに差延化の働きを見る柄谷は、明らかに先ほど引用した『グラマトロジー』のソシュール解釈に基づいている。この柄谷によるデリダの援用は、マルクスが『ドイツ・イデオロギー』で言及している欠如をかかえた人間の身体

(82) Jacques Derrida, *De la grammatologie*, op. cit., p. 99 (前掲邦訳、上巻、139頁)。強調はデリダ。

(83) *Das Kapital*, MEW23, p. 102; 『全集』23-a、118頁。

(84) 柄谷行人『マルクスその可能性の中心』(前掲)、126頁。

的組織——それが人間と自然の関係を規定している——について論じる文脈でなされているが、その含意は『資本論』の流通過程の議論をも包摂する射程をもっている。

流通過程の売り(W-G)と買い(G-W)の分離は、まさに価値を生み出す「あいだ」が生成する契機である。すでに見たように、この販売と購買の「あいだ」は、資本主義の剰余価値の生産の条件であると同時に、そのシステムを揺さぶる恐慌の可能性の条件でもある。資本による剰余価値生産の運動は、流通のギャップにおける空間化^{エスバスマン}=間隔化の組織化、「あいだ」に生じる差異の価値への転換として考えることができるだろう。とすれば、流通過程の「あいだ」に生起する恐慌は、純粋な剰余価値蓄積のシステムに還元することのできない空間化^{エスバスマン}=間隔化の帰結の発現と言えるだろう。このように、柄谷のマルクス読解は、原エク^{アルシ}リチュール、空間化=間隔化としての差延といったデリダの思想と呼応しながら、生産と労働から商品経済を論じる労働価値説の視座を、流通過程が開く問題系(貨幣、売りと買いの分離、恐慌)を対置することによって脱臼させる試みだと言える⁽⁸⁵⁾。

3. 二通りの「マルクスとデリダ」

グーと柄谷の思考はともにマルクスの『資本論』の経済学批判と、デリダの『グラマトロジー』のエク^{アルシ}リチュールの問題系——そこで相手取られる言語学、記号学——を架橋する試みと見做すことができた。他方で、同じような問題に取り組みなながらも、両者の思考はいくつかの根本的な点で異なっている。本章では、グーと柄谷を付き合わせ、その差異を明らかにしながら、マルクスとデリダの接続を図るうえで継承すべき思考の筋道を探る。

3-1. 生産と流通

両者のあいだにおける最も目につく差異は、『グラマトロジー』において最も重要な戦略素ともいえる「原エク^{アルシ}リチュール」に関して、そのマルクスの問題圏のなかでの対応物を何にとるかという点において現れる。グーが「原エク^{アルシ}リチュール」を「具体的労働」あるいは

(85)『トランスクリティーク』以降の柄谷は、テクストの読解を旨とする批評の仕事から、世界史の展開を分析する理論の構築という体系的な仕事へと重心を移している。その新たな取り組みは、『世界共和国へ』(2006年)、『世界史の構造』(2010年)、『帝国の構造』(2014年)といった近年の著作において結実するが、これらの著作群においても、マルクス読解から導き出された「交換」への照準は一貫して見てとることができる。従来のマルクス主義唯物史観が歴史を社会構成

体における「生産様式」の変遷として語るのに対して、柄谷は「交換様式」という観点から歴史を見ようとする。柄谷は、異なる四つの交換様式——すなわち、交換様式A: 互酬、交換様式B: 略取-再配分、交換様式C: 商品交換、交換様式D: X(交換様式Aの高次元での回復)——を案出し、その複合としての社会構成体の変遷を指標に世界史の展開を分節化することを提唱している(柄谷行人『世界史の構造』(岩波書店、2010年)改訂版、岩波現代文庫、2015年、2-18頁)。

端的に「労働」との対応関係に置いていたのに対して、柄谷はそれを「価値形態」と結びつける。柄谷の議論において、価値形態は売りと買いの分節化の形式であるのだから、価値形態に原エクリチュールを見ることは、原エクリチュールを交換・流通の局面において捉えることを意味する。これは、グーが一貫して労働において差延の力動を見出し、労働力が使用される生産過程に原エクリチュールを割り当てたのと好対照をなしている。ここに、商品の価値を労働・生産から捉えようとする立場と交換・流通から見ようとする立場の対立がある。

本稿ではここまで、労働・生産に基礎をおき、流通を批判する方向性においてマルクスとデリダの接合を図ろうとする立場としてグーを取り上げてきた。だが、このような発想はグー個人の独創とは言えない。それはむしろ、60年代末にグーもその近傍にあった『テル・ケル』サークルの集合的思想とでも言うべきものだ⁽⁸⁶⁾。グーと同様の言語と経済のアナロジーは、例えば前述の『理論集成』に所収されているジュリア・クリステヴァのテキスト⁽⁸⁷⁾にも確認することができる。クリステヴァはグーと同様の文脈のうえで、マルクスの限界を指摘している。クリステヴァは記号学の領野に「交換の問題系」と「労働の問題系」の相剋を見ている。彼女の理論的関心は、記号学の批判的刷新を目指すなかで、流通・分配・コミュニケーションに偏した視点を脱し、「意味産出[signifiante]」のモデル、「生産の記号学」⁽⁸⁸⁾を構築することに向けられている。経済の言葉でいえば、「交換に制御された生産」⁽⁸⁹⁾ではなく、「価値に先立つ生産性」、「意味以前の労働」⁽⁹⁰⁾をいかに理論的に跡づけるかが問題となる。クリステヴァの議論では、マルクスの経済学批判は記号学批判のポテンシャルを秘めながらも、交換の問題系の内にとどまるものとして、その限界が強調されている。

彼〔マルクス—引用者註〕がおこなっているのは、経済学の批判的記述のみである。それは労働—価値を隠す記号の(価値の)交換システムの批判である。貨幣の流通を論じたマルクスのテキストは、それを批判として読むなら、(コミュニケーションを

(86)『理論集成』の巻頭に置かれた無記名の序文「集合の分割[Division de l'ensemble]」の冒頭で、刊行当時の直近数年のあいだに繰り返し論じられてきた「理論的ブレークスルー」の兆しを示す決定的な諸概念として、「*écriture, texte, inconscient, histoire, travail, trace, production, scène*」の8つが列挙されている。当時の最先端の(と目されていた)理論的な営み特徴づける鍵概念のなかに、「エクリチュール」、「痕跡」というデリダのタームと、「生産」、「労働」というマルクスのタームが混在する事実は、グーを含めたテル・ケル派の思考においてデリダとマル

クスが、とりわけ両者の論説の結合のあり方が重要な論点としてあったことを窺わせる。

(87) Julia Kristeva, « La sémiologie: science critique et/ou critique de la science », publiée initialement dans *La Nouvelle Critique*, n° 16, 1968, et reprise dans *Théorie d'ensemble*, op. cit. 同テキストからの引用は*Théorie d'ensemble*により、同書の該当箇所を記す。

(88) *Ibid.*, p. 91.

(89) *Ibid.*, p. 90.

(90) *Ibid.*, p. 88.

目的とする)言説が到達した頂点のひとつである。しかしそのテキストは、生産という基盤のうえにある測定されうるコミュニケーションについてしか語ることができず、生産という基盤はただ指し示されているにすぎないのである。⁽⁹¹⁾

これに続く部分では、マルクスの貨幣流通の批判的分析と、流通論的記号観に対するデリダの批判——デリダはアルファベットを「商業的」なもの、「経済合理性の貨幣的契機」と位置づけ、貨幣の批判的分析はエクリチュールについての考察に通じるものだと論じている⁽⁹²⁾——との親和性が指摘される。そしてさらに、流通の圏域の限界で立ち止まったマルクスの歩みを引き継ぎ、「生産」の理論へと踏み入るための道標としてデリダの一連の概念系——「^{グラム}痕跡」「書字」「差延」「文字以前のエクリチュール」——が参照される⁽⁹³⁾。このように、クリステヴァにおいても、マルクスとデリダを結ぶ線は流通から生産へという方向性のもとに引かれている。グーの論考は、こういった記号(商品)の流通に対する批判とエクリチュール(生産、労働)の重視という同時代のテル・ケルの思想圏⁽⁹⁴⁾のただなかにある。

ところで、生産の問題系と流通の問題系はどちらか一方を選ばなければならないものなのだろうか。われわれの問題に引きつけて言えば、グーが示した生産過程における「^{タン ポリザ ショ ン}時間かせぎ=遅延化」としての差延と、^{エ ス バ ス マ ン}柄谷が流通過程に見た「空間化=間隔化」としての差延は、どちらか一方が真で他方が偽であるようなものなのだろうか。われわれには、〈生産か、流通か〉というテル・ケル流の排他的な二者択一に従わねばならない謂われはない。ここで注目したいのは、柄谷が生産と流通とを包摂するひとつの視座を提示している点である。剰余価値はどこから生じるのかという問いに、柄谷は、体系間の差異からと応えている。剰余価値蓄積の純粋なたちは、ある商品を安い体系で買って、高い値をつける体系で売る商人資本の形式で現れる。そして柄谷は、一般に生産に基づく資本蓄積の形式と目される産業資本における剰余価値についても商人資本の形式のもとで考えるべきだと言う。生産という局面で見ると、産業資本における剰余価値、とりわけその本質的な形態である相対的剰余価値は、工場内での協業と分業の強化による労働の生産性の増大——資本家の指揮にお

(91) *Ibid.*, p. 88-89. 強調はクリステヴァ。

(92) Jacques Derrida, *De la grammatologie*, *op. cit.*, p. 424 (前掲邦訳、下巻、301頁)。

(93) Julia Kristeva, « La sémiologie: science critique et/ou critique de la science », *art. cit.*, p. 89.

(94) 同様の思想傾向は、以下のように書くジャン＝ルイ・ボードリイにも濃厚に感じられる。「すべては生産と生産の諸過程が流通と交換のために隠されてしまったかのように進行する」、「流通

は、価値の交換を表現し可能にする——すなわち法の至高性を明示する——合法性そのもののゆえに行われるが、他方生産はこの同じ合法性への活発な異議申し立て、脅威、転覆として現れる」(Jean-Louis Baudry, «Linguistique et production textuelle», *art. cit.*, p. 352)。

ける個別的な労働力の「労働の社会的生産力」⁽⁹⁵⁾への組織化——によってのみ生まれる。だが、柄谷は「一つのシステムのなかでは、けっして剰余価値は生じ」ず、剰余価値は「二つの相異なるシステムを作り出す」ことで生じると述べる⁽⁹⁶⁾。ここで注目されるのは、『資本論』のなかで労働力という特異な商品がもたらす時間的ズレについて語られる部分である。

[...]その[労働力の一引用者註]使用価値はあとで行われる力の発揮においてはじめて成り立つのである。だから、力の譲渡と、その現実の発揮すなわちその使用価値としての定在とが、時間的にはなれているのである。⁽⁹⁷⁾

この箇所について柄谷は次のように注釈する。

労働の生産性の上昇は、分業や協業の強化によろうと、機械の改良によろうと、労働力の価値を潜在的にさげろ。これはつぎのようにいいかえてもよい。資本家は、すでにより安くつくられているにもかかわらず、生産物を既存の価値体系のなかにおくりこむ。つまり、潜在的には労働力の価値も、生産物の価値も相対的に下げられているのだが、このことはただちには顕在化しないのである。だから、現存する体系とポテンシャルな体系が、ここに存在する。したがって、われわれは産業資本もまた、二つの相異なるシステムの中間から剰余価値を得ることを見出すのである。／われわれは、商人資本がいわば空間的な二つの価値体系の——しかもそこに属する人間にとっては不可視な——差額によって生じることを明らかにしたが、産業資本はその意味で、労働の生産性をあげることで、時間的に相異なる価値体系をつくり出すことにもとづいているといってもよい。⁽⁹⁸⁾

商人資本はある商品を安い体系で買い、高い体系で売ることで剰余価値を得る。ここでは、遠隔地交易における地理的に隔たった相異なる体系のあいだの空間的差異が剰余価値の源泉となる。これに対して、産業資本では、労働力や労働生産物が譲渡(売買)される「現存する体系」と労働力が発揮され商品が生産される「ポテンシャルな体系」との時間的差異が剰余価値を生む。つまり、産業資本家は、分業や協業の強化、機械の改良などにより労働の

(95) *Das Kapital*, MEW23, p.353; 『全集』23-a, 437頁。

(96) 柄谷行人『マルクスその可能性の中心』(前掲)、76頁。

(97) *Das Kapital*, MEW23, p. 188; 『全集』23-a, 227頁。

(98) 柄谷行人『マルクスその可能性の中心』(前掲)、78頁。強調は柄谷。

生産性を高め、生産過程において「潜在的には労働力の価値も、生産物の価値も相対的に下げられている」価値の体系をつくりだし、そこで生産された商品を「既存の価値体系」で売り払うことによって剰余価値を得る。産業資本家は、時間的に相異なる価値体系をつくりだすこと、あるいは時間的に価値体系の「あいだ」を組織することをその本分とするのだ。

このような柄谷の視点——あるいは複数の視点の差異としての「視差」⁽⁹⁹⁾——というべきか——に立つとき、商人資本と産業資本はともに、売りと買いの分離によって生じる「あいだ」の差異を組織することに存する。したがって、両者はいずれも貨幣を介した商品交換が開く「空間化=間隔化」であり同時に「時間化=遅延化」でもある差延化の契機に根ざした運動と見做することができる。そこでは、流通と生産は、テル・ケルの理論家たちが想定していたような相互排他的な対立をなすのではなく、体系間の差異、体系の差延化というより射程の広い問題のもとに包摂される。

労働が交換か、生産か流通かという対比は、グーと柄谷の思考の射程を測定するうえでは大雑把で暫定的な指標として役立つにすぎない。実際、60年代末の「労働の書き込み」、「古銭学」以降、グーの仕事は『言語の金遣い』⁽¹⁰⁰⁾、『価値の移り気』⁽¹⁰¹⁾といった著作に見られるように、労働よりも交換と流通(市場経済)の観点から経済と言語のアナログな関係を分析する立場へと重心を移すようになる。両者の根本的な差異は別のところに見出されねばならない。

3-2. 体系と壊乱

グーと柄谷を分かつ線はどこにひくことができるのか。両者の差異が明瞭に現れるのは、同一の対象を扱うときの態度においてである。それは、とりわけ価値形態論の読み方をめぐって現れる。グーは価値形態論を価値システムの生成の一般理論として読む。そのシステムは、厳格に区別された二項対立的カテゴリーの位階秩序として現れる。使用価値と交換価値の対立と前者の後者への還元、労働と価値の対立と後者による前者の統制、生産過程と流通過程の対立と後者の前者に対する優位。こういったハイアラキカルな諸構造は、ひとつの「時代 [époque]」に内属しており、その時代の連続性を支える基本的、基底的な構造をなすと思われされる。「労働の書き込み」のグーは、ロゴス中心主義の時代の内部では乗り超え不可能であるような相同的な諸構造の全体像を静的に描くことに傾注している。これに続くテキスト「古

(99) 佐藤嘉幸は、資本主義のシステムを「差異化された複数のシステム」がもたらす「視差」から捉えた点に、『マルクスその可能性の中心』の革新性を見ている(佐藤嘉幸「柄谷行人と新たなマルクスの哲学——『マルクスその可能性の中心』を再読する」『思想』2011年第4号、173-186頁)。(100) Jean-Joseph Goux, *Les monnayeurs du langage*, Galilée, 1984 (ジャン・ジョセフ・グー『言語の金使い 文学と経済学におけるリアリズムの解体』土田知則訳、新曜社、1998年)。(101) Jean-Joseph Goux, *Frivolité de la valeur. Essai sur l'imaginaire du capitalisme*, Blusson, 2000.

銭学」では、その「時代」を規定する諸構造の生成と歴史が主題となる。グーは、マルクスの価値形態論を参照しながら一般的等価物の諸システムの生成における同型的な発展過程を描き出す。そこでは、さまざまな価値システムの総体としての「時代」の閉域性が強調される。

四つの段階、すなわち I) 単純な形態、II) 展開された形態、III) 一般的形態、IV) 貨幣形態、への区分は、商品の総体のなかでの金商品の至高性への接近を通時的に分節化し、金商品に中心化機能を賦与する。この区分は、厳密で、おそらくシニフィアン^{エポック}の秩序にとって特殊かつ一般的な形式的必然性に従う。その必然性は、少なくともある体系、ある時代^{エポック}の内部における形式的必然性であり、それによってこの時代が、その諸領域、諸業種[compartiments] (その語の証券的意味における) の階層構造と隔たりにもかわらず、それらを貫いて、隅々まで象られている必然性である。⁽¹⁰²⁾

金商品による諸商品の支配によって範例的なかたちで示めされるハイアラーキーは「形式的必然性」としてその「時代」を閉域として構成する。したがって、内部からは覆しがたい「時代」の構造を転覆するためには、別の「時代」の到来を待たねばならない。

マルクスによる(字句通りかつ治療的な)素描にしたがえば、この首尾一貫した構造——それは「価値に基づいた生産」に対応する——の全面的な乗りこえによって、もうひとつの時代へ、来たるべき時代へと差し向けられると定式化することが可能になる。この来たるべき時代^{エポック}は、労働時間が価値尺度であることをやめ、交換価値もまた使用価値の尺度であることをやめるような経済のうえに基礎を置く時代である[...]^{エポック}。この価値と意味に基づいた生産の終焉は同時に次の二点を前提とする。I) 労働の分断(流通の外部への具体的生産の排除)が廃棄されること、II) それと相関しているが、代補の引き受け、機械の制限無き永久の使用が実現されること。⁽¹⁰³⁾

こうして、グーの歴史観は、一般的等価物によって統御される価値システム(意味システム)の時代から、それらが廃棄される「来たるべき時代^{エポック}」へという断絶を孕む移行論のかたちをとる。

これに対し、柄谷は時代を截然と分かつ歴史的な移行論として価値形態論を読むことを拒む。

(102) Jean-Joseph Goux, « Numismatiques (I) », *Tel Quel*, n° 35, Seuil, 1968, p. 74. 強調はグー。

(103) Jean-Joseph Goux, « Numismatiques (II) », *Tel Quel*, n° 36, Seuil, 1969, p. 69-70, Note 137. 強調はグー。

マルクスがヘーゲルの論理学にしたがって、商品から貨幣、貨幣から守銭奴、商人資本、さらに産業資本への「発展」を叙述する。しかし、われわれはそれを逆に読まねばならない。マルクスの叙述において、「発展」は矛盾の止揚ではなく、その隠蔽(抑圧)なのだ。われわれは、最も発展した段階において消され、ただ恐慌においてのみあらわれるようなものを、その始原的な形態に遡行することによって解明しなければならない。むしろ、それは歴史的な始原ではない。できあがった資本制経済の中に存在する形式としての始原、つまり商品形態(価値形態)である。⁽¹⁰⁴⁾

柄谷は、価値形態論に歴史的移行ではなく、「遡行」を見る。それは、単純な形態から完成した貨幣形態への発展の歴史としてではなく、商品体系を成り立たせている「始原的な形態」への遡行として読まれるのだ。柄谷にとって、価値形態論は、商品経済を支える根本的形式の探究であるという意味において、無時間的で、非歴史的なテキストである。しかし、そのような価値形態は、移行論とは違ったかたちで時間と歴史へと開かれている。価値形態に時間と歴史を導入するのは、交換過程、流過程であり、そこに胚胎する恐慌である。前章で見たように交換・流通の過程における資本蓄積の動態から顧みるとき、価値形態が示す非対称性は、恐慌において顕在化する売りの困難を始原的なかたちで示すものであった。資本蓄積は、購買と販売の分離を不可避免的に孕み、それゆえ恐慌の可能性に憑かれている。そしてまた、価値形態Aが示していた相対的価値形態と等価形態(したがって商品と貨幣)の非対称性は恐慌のたびに商品世界に回帰する。資本主義経済の時間は、価値形態に淵源する恐慌の反覆的到來によってリズムを打たれているといえよう。

柄谷の立場から時間・歴史を捉えるならば、ある時代から別の時代への移行論的な時間・歴史ではなく、反覆に基づき、「形式としての始原」が現在へと錯時的に回帰する時間・歴史となるだろう。ここでモーリス・ブランショがマルクスの『資本論』について書いた一節が思い起こされる。

とはいえ、『資本論』はなによりも壊乱的な[subversive]作品である。それが科学的客観性という道を経て、革命という必然的な帰結へと至るからというよりも、言葉ではさほど言い表していないが、科学という観念そのものを覆す理論的な思考様式を内包して

(104) 柄谷行人『トランスクリティーク』(前掲)、240頁。

いるから、壊乱的なのである。実際、科学も思考もマルクスの作品から無疵のまま引き出されることはできない。それは、科学が科学自体の根本的な変革として、実践のなかでつねに問われている変革の理論として、そしてこの実践のなかでの、やはり理論的な変革として指し示されるかぎり、もっとも強い意味でそうなのである。⁽¹⁰⁶⁾

『資本論』の価値形態論を「価値の科学」として読むグーに対して、柄谷は価値形態論を流通过程および恐慌へと結びつけながら、「価値の科学」の体系にはつねにすでに「壊乱的」な亀裂が走っていることを浮き彫りにする。この意味で、前章で柄谷の読解に沿って見てきた恐慌という錯時的な契機へのマルクスのまなざしは、『資本論』が「壊乱的な作品」であることのひとつの傍証であると言えるだろう。

3-3. 事前と事後

以上で述べてきたグーと柄谷のコントラストは、価値形態論を読む際のまなざしの差異、まなざしが定位する立場の差異としても現れてくる。それは、柄谷の言葉でいえば、「事後」と「事前」のポジションの差異として捉えることができるだろう。このデイクトミーの観点からすれば、グーは「事後」に立って価値形態論を読んでいると言える。

貨幣形態の生成過程が明らかにする歴史的構造化の型は、あまたあるなかの、ひとつの歴史的構造化、ひとつの歴史ではないだろう。それは西洋世界の歴史的構造化の運動そのもの、歴史そのものであろう。歴史の歩みとは、一般的等価物の原理によるすべての水準での整序へと向かっていく、社会構成体全体の発達なのであり、歴史の頂点(終止点とはいわない)とは、大いなるシニフィアン、認知され、承認されたヘゲモニーの獲得、一般的等価物のすっきり確立された支配なのである。ところで、この支配は現れてしまったように思われる。歴史の頂点は現れてしまっているのだ。意識の歴史と意識としての歴史は完成した。その歴史は意味と価値に基礎を置く生産様式をもって完成し、われわれは今日この頂点(科学としての歴史の始まり)の事後[l'après-coup]を甘受しているのだ。⁽¹⁰⁷⁾

(106) Maurice Blanchot, «Les trois paroles de Marx», *L'amitié*, Gallimard, 1971, p. 116 (「マルクスを読む」『ブランショ政治論集 一九五八—一九九三』安原伸一郎・西山雄二・郷原佳以訳、月曜社、2005年、204頁)。なお、デリダは『マルクスの亡霊たち』において、マルクスのテキストを取り巻

く「科学主義イデオロギー」からその亡霊性を救い出そうとする際に、このブランショの言葉を参照している。Cf. Jacques Derrida, *Spectres de Marx*, op. cit., p. 63-64 (掲掲邦訳、84-86頁)。

(107) Jean-Joseph Goux, «Numismatiques (II)», *Tel Quel*, n° 36, Seuil, 1969, p. 56. 強調はグー。

「歴史の頂点」の「事後」という地点に立つとき、価値形態論は「西洋世界の歴史的構造化の運動そのもの」として意味づけられる。言い換えれば、歴史の「事後」というグーの立脚点こそが、一般的等価物のヘゲモニーを完結した無疵の体制として、内部からは乗り越えがたい閉域的な「時代[époque]」として記述することを要請するのだ。

他方、柄谷は「事後」の立場に「事前」の立場を対置する。

アダム・スミスは、商品とは使用価値と交換価値である、という。だが、どうしてそのようにいえるのか。それは、商品が首尾よく他の商品（貨幣）と交換された後である。すなわち、スミスは事態を事後的に考えている。もし或る物が交換されることに失敗したとしたら、それは使用価値すらもたない。たんに廃棄されるだけである。ところが、そのことを事後的に見たスミスは、それを事前に投射し、あらかじめ、商品には交換価値がふくまれていると考える。[…]/一方、マルクスも、商品の使用価値と交換価値について語る。しかし、彼はそれを「総合」として捉えている。いいかえれば、彼はその事態を「事前」から見たのだ。「事前」から見ると、この総合が達成される保証はない。⁽¹⁰⁸⁾

ここでは、先に引用した商品の販売を「命がけの飛躍」と名指した『資本論』の一節が踏まえられている⁽¹⁰⁹⁾。流通過程論の言葉で言い換えれば、「事前から見る」とは商品売る立場に立つことであり、商品の販売に「命がけの飛躍」を、すなわち使用価値と交換価値の困難な総合を見る視点である。そして、使用価値と交換価値の総合が孕む無根拠性・不安定性とは、価値形態論の問題として捉えるならば、シニフィエとしての相対的価値形態とシニフィアンとしての等価形態が非対称なままに分立していること、すなわち商品の価値表現が二つの対極の結合という困難を経ることのみ達成されるということである。「事前」の立場にとどまるとき、それ自体で使用価値であり交換価値であるような商品も、そのような自己充足的な商品の集合としての価値システムも、流通における「命がけの飛躍」を見ないことで成立する虚構にすぎない。「事前」における困難な飛躍、総合を先取りして——あるいは、無いものと見做して——、その困難を隠蔽する態度を、柄谷は「事後」の立場と名づけるのである。

しかしながら、「事前」と「事後」を切り分けて満足するわけにはいかない。というのも、『資本論』に従うかぎり、「事後」に見出されるシステムはつねに「事前」を巻き込むかたち

(108) 柄谷行人『トランスクリティーク』(前掲)、291頁。

(109) *Das Kapital*, MEW23, p. 120; 『全集』23-a, 141頁。

でのみ作動するからだ。資本の蓄積過程は、必ず売りの立場という「事前」を通り抜けなければならない。流過程はいたるところで、売る立場を、したがって潜在的な私たちではあれ、売りの困難、総合の危機を通過している。そして、その潜在的な困難は恐慌において集約的に発現する。

商品の第一の変態は同時に売りでも買いでもあるのだから、この部分過程は同時に独立な過程である。買い手は商品を手に入れ、売り手は貨幣を、すなわち、再び市場に現れるのが早かろうとおそかろうと流通可能な形態を保持している一商品を、手に入れる。別のだれかが買わなければ、だれも売ることはできない。しかし、だれも、自分が売ったからといって、すぐには買わなければならないということはない。⁽¹¹⁰⁾

恐慌は売りと買いを分かち「空間化＝間隔化」の前景化として考えることができた。ここではさらに、恐慌を「事後」の体系に「事前」が忍び込む錯時性の契機として捉えることができるだろう。別言すれば、恐慌とは、商品のよどみのない流通を前提にする価値の現前＝現在の体制——独立した一つひとつの商品に価値が現前することを想定する体制——に忍び込む忘れられた過去の侵入なのだ。前掲の引用では、「事後」の思考としてアダム・スミスがあげられていたが、われわれの文脈でいえば、グーもまた「事後」の思考に傾斜している。グーは貨幣形態の生成をもって価値システム——グーにとってそれは批判の対象であり、乗り越えられるべき体制であるわけだが——の完成を宣言し、それ以降を「歴史の頂点」の「事後」という不可逆的な地点として位置づける。そこに欠けているのは、「事後」に「事前」が回帰する流過程の作動と空間化＝間隔化の契機に対するまなざしである。

このようにして、デリダを介したマルクスへのアプローチという同一地点から発したかに見えるグーと柄谷の思考は、明らかに異なる軌道を描き、対極ともいえる別々の地点にたどり着く。柄谷の地点は、「事前」の侵入としての、あるいは「抑圧されたものの回帰」としての恐慌という流過程の特異点への注目と、その回帰の可能性の条件としての「価値形態の非対称性」、「売り」と買いの分離、「総合の危機」といった契機へのまなざし、デリダ的にいえば「空間化＝間隔化」としての「差延」の契機へのまなざしによって特徴づけられる。そのような柄谷の「事前」の立場は、生産に立脚し「事後」的体制を相手どるグーの立場か

(110) *Das Kapital*, MEW23, p. 127; 『全集』23-a、
149-150頁。

らは明確に分け隔てられている。

4. 『資本論』の亡霊

それでは、このようなマルクスとデリダの読者によってなされた二人の思想の遭遇の試みは、デリダ本人が90年代に手がけたマルクス論とどのような関係を取り結ぶうのか。先取りの指摘しておけば、『マルクスの亡霊たち』のデリダによるマルクスへのアプローチは、柄谷のマルクス読解と強い親和性があるように思われる。すなわち、柄谷が『資本論』に見てとる流通の「あいだ」に生起する恐慌を特徴づける二つの指標、すなわち反覆的な回帰のリズムと事前的なものの事後的体系への侵入という論件は、デリダがシェークスピアの『ハムレット』を触媒にしてマルクスのテキストに浮かび上がらせる「亡霊性[spectralité]」、「回帰するもの=幽霊[revenant]」の主題と強く共鳴していると考えることができる。以下、『マルクスの亡霊たち』に目を移し、デリダの『資本論』への応接と柄谷のマルクス論との接点を探る。

4-1. 『資本論』のエクソシズム

デリダは『マルクスの亡霊たち』において、マルクスの遺産を批判的に「継承」せんがために、「憑在論[hantologie]」と呼ばれる試みにおいてマルクスの一連のテキストを読み返す。「憑在論」においては、時ならず「回帰するもの^{ルグナシ}=幽霊」、現前とも不在ともいえぬ「亡霊」に取り憑かれてあることの全面的な引き受けと、そういった亡霊性を追い払おうとするエクソシスト的思考への抵抗が賭け金となる。そこでデリダはあたかも亡霊的なものが出没する細部を数珠つなぎにするかのように、『共産党宣言』、『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』、『ドイツ・イデオロギー』、『資本論』、『経済学批判』——もつとも長く言葉が費やされるのは『ドイツ・イデオロギー』（シュティルナー批判にあてられた第一巻第三篇）である——といったテキストのあいだを漂流するにまかせている。ここでは、柄谷の読解との関係を明らかにするために『資本論』および『経済学批判』に触れた箇所¹¹¹に焦点を絞って見ていく。

デリダは、『資本論』⁽¹¹¹⁾において、亡霊性と決別しようとするエクソシスト・マルクスと、亡霊性を迎え入れようとする憑在論的マルクスの二重性を見ている。デリダが注目するのは、商品のフェティシズムを論じた節（第一巻第一篇第一章第四節「商品の呪物的性格とその秘密」）の冒頭部分である。

(111) デリダが参照している『資本論』のフランス語訳は以下。Karl Marx, *Le Capital*, Livre I, publié sous la responsabilité de Jean-Pierre Lefebvre, PUF, coll. Quadrige, 1993. 以降、このPUF版『資本論』をグーが参照していたモリ

ートル訳コスト社版(V.F.C)と区別するために、略号V.F.Pで表記する。本章の『資本論』からの引用は、V.F.Pから訳出したものを用いる。引用箇所については、MEW版、邦訳『全集』版、V.F.Pの該当箇所を併記する。

商品は、一見、まったく自明で平凡なものに見える。分析してみると、商品は極めて気むずかしいもので、形而上学的小理屈や神学的小言で満ちたものであることが判る。使用価値であるかぎり、商品には神秘的なところは少しもない。[...]たとえば、材木の形態は、もしこれで一脚の机をつくるならば、変化する。それにもかかわらず、机はやはり木のままであり、ありふれた感覚的なものであることはかわらない。ところが、机が商品として登場する [entre[r] en scène] やいなや、感覚的にして超感覚的なものに変貌する。机はもはや脚で地面に立つのみならず、他のすべての商品にたいして頭で立つ。そしてその小さな木の頭からは、机が突然独り独りで踊り出すときよりもはるかに驚くべき妄想を放出する。／だから、商品の神秘的な性格は商品の使用価値からは出てこないのである。⁽¹¹²⁾

この件で、マルクスはまず、机という生産物が市場に登場した途端、「机が突然独り独りで踊り出す」以上の「妄想」を生み出す奇怪な対象に変貌すると言っている。その奇怪さは、「使用価値」としての「感覚的」側面のみならず、交換価値としての「超感覚的」側面をあわせもつ商品の二重性に由来する。デリダはまず、「感覚的にして超感覚的」という「神秘的な性格」に亡霊性を見てとる⁽¹¹³⁾。他方、彼が注目するのは、生産物と商品の領域を切り分けようとするマルクスの身ぶりである。マルクスは、物は単なる使用価値であるかぎり「神秘的なところは少しもない」と言い、「机が商品として登場するやいなや、感覚的にして超感覚的なものに変貌する」と言う。「商品として登場する」とは物が市場という舞台へとのおぼることを意味するだろう。とすれば、ここに市場への登場以前と市場への登場以後という二つの領域が想定されているのではないか。マルクスは市場の舞台に上る以前の商品に「使用価値」のみを認め、そこから使用価値であり交換価値でもあるという奇怪な身体性、「感覚的にして超感覚的」という亡霊性を悪魔祓いしようとしているのではないか、デリダはこう問うのだ⁽¹¹⁴⁾。デリダは、『資本論』のなかに、市場における亡霊化と亡霊なきそれ以前という分離によって、亡霊を市場という限定的な領域に押しとどめようとする所作、いわば悪霊封じ込めのエクソシスト的所作を見てとる。しかも、デリダによれば、この亡霊化の開始点の恣意的策定は、亡霊化の終点の実体化と即応している。マルクスは次のように書いている。

(112) *Das Kapital*, MEW23, p. 85; 『全集』23-a, 96頁;
V.F.-P, p. 81-82.

(113) Jacques Derrida, *Spectres de Marx*, *op. cit.*,
p. 240 (前掲邦訳、313頁).

(114) *Ibid.*, p. 255-256 (同上、331-332頁).

こういった[錯乱した—引用者註]諸形態こそが、まさにブルジョア経済学の諸範疇を構成している。これらの諸形態は、商品生産という歴史的に規定された社会的生産様式の生産関係にとって社会的妥当をもち、したがって客観性をもつ思想形態なのである。それゆえ、商品世界のあらゆる神秘、商品生産の基礎のうえで労働生産物を幽霊的な霧[une brume fantomatique]によって包み込むすべての魔力は、われわれが他の生産形態に逃げ込めば、たちまち消えてしまうのである。⁽¹¹⁵⁾

商品の亡霊的な現れは、マルクスが想定する別の生産形態への移行によって雲散霧消してしまうものであるとされる。デリダの批判は、マルクスが亡霊を厄払いし、完全に亡霊性を取り除いた社会の到来を想定している点に向けられている⁽¹¹⁶⁾。『マルクスの亡霊たち』では、マルクス主義もそこに内属した「歴史」と「歴史の終焉」以後を明確に分け、マルクスの亡霊的回帰とその遺産の継承への途を封殺するフランシス・フクヤマの『歴史の終わりと最後の人間』を俎上に載せ、不可逆の地点としての黙示録的な終末を語る「終末の言説」に対する批判が展開されていた⁽¹¹⁷⁾。デリダが『資本論』に見たエクソシストの举措は、マルクスにおける「終末の言説」の残響として考えることができる。と同時に、われわれの文脈では、それはグーに見られた一般的等価物の体系とその生成に対する移行論的な構えとも通じ合っていると言えよう。

4-2. 『資本論』の憑在論

他方、デリダは『資本論』のなかに、エクソシズムの前提を掘り崩す憑在論の位相があることを指し示めている。とりわけその憑在論的な契機は、交換過程論(第一巻第一篇第二章)において見出される。マルクスは、商品形態において、人間の社会的生産関係が生産物の社会的関係として反映されているとし、「この置き換え(quiproquo)によって、労働生産物は商品になり、感覚的にして超感覚的な物、または社会的なものになる」⁽¹¹⁸⁾と述べる。デリダは、この商品形態における「置き換え」によって出来する亡霊的なもの——「感覚的にして超感覚的なもの」——が、同時に「社会的なもの」であると指摘されている点を重視する。マルクスが亡霊以前において夢想していた純粋な「使用価値」もまた、社会的関係という観

(115) *Das Kapital*, MEW23, p. 90; 『全集』23-a, 102頁; (118) *Das Kapital*, MEW23, p. 86; 『全集』23-a, 98頁; V.F.-P, p. 87. V.F.-P, p. 83.

(116) Jacques Derrida, *Spectres de Marx*, op. cit., p. 259-261 (前掲邦訳, 336-338頁).

(117) *Ibid.*, p. 97-127 (同上, 132-170頁).

点から見返されねばならない。実際、マルクス自身が交換過程論で次のように述べている。

所持者にとって彼の商品は直接の使用価値をもたない。さもなくば彼は商品を市場にもっていかないだろう。商品は他人にとっての使用価値をもつ。⁽¹¹⁹⁾

[...]諸商品は使用価値として実現されうる前に価値として実現されなければならない。／他方、諸商品は自分を価値として実現されうる前に使用価値として認められなければならない。⁽¹²⁰⁾

社会的分業が十分に発達した市場のもとでは、商品は純粹な使用価値であることはできず、同時に価値(交換価値)でもあらねばならない。ここでは、孤立した使用価値はなく、使用価値は、常にすでに「交換とやりとりの可能性」⁽¹²¹⁾に取り憑かれている。このように、マルクスがエクソシストの手つきで亡霊性を厄払い(conjurer)して取り出した「使用価値」に、デリダは、「社会性」、「他者性」、「交換可能性」の憑在を見てとる。あるいは、追放した亡霊を再び呼び戻すマルクスを見るのだ。

ここでわれわれは、デリダが社会性や他者性を刻印された場であるところの「市場」あるいは「流通」を、亡霊性を察知するための観測点として導入していることに注目しなければならない。商品は市場で他者によって貨幣に交換されねばならず、流過程としては商品－貨幣－商品という商品身体の変転を通り抜けなければならない。デリダは、商品形態の幽霊的な定在、使用価値であり交換価値でもある二重体、感覚的であり超感覚的でもある亡霊的身体性を、市場と流通の観点からつかもうとする。

たとえ、しかじかの商品を使用価値に換えること、他のしかじかの商品を貨幣に変えることが独立した停止点を印づけ、流通のなかにひとつの静止を印づけるにしても、流通は無限のプロセスであり続ける。『経済学批判』がかくも執拗に喚起するように、M-A-M(商品－貨幣－商品)という流通の総体は「始めも終わりもない系列」である。しかしそうであるのは、使用価値、商品、貨幣のあいだでの変貌があらゆる方向で可能であるからにほかならない。⁽¹²²⁾

(119) *Das Kapital*, MEW23, p.100; 『全集』23-a、114頁; p. 254 (前掲邦訳、330頁)。

V.F.-P., p. 97.

(122) *Ibid.*, p. 256-257 (同上、333頁)。

(120) *Das Kapital*, MEW23, p.100; 『全集』23-a、115頁;

V.F.-P., p. 97-98.

(121) Jacques Derrida, *Spectres de Marx*, op. cit.,

商品はそれ自体で使用価値でありかつ交換価値であるのではない。そのような実体的な商品観は流通過程の結果を商品の性質に事後的投射したものすぎない。M-A-Mの「無限のプロセス」、「始めも終わりもない系列」としての流通こそが、その交換の連鎖の効果として、使用価値(感覚的なもの)であり交換価値(超感覚的なもの)であるような商品の身体性を現出させる、デリダはこの点を強調する。このようにして、流通過程が商品の亡霊性を発生させる運動として把握されるのだ。

ここでわれわれは、デリダが示してみせた『資本論』におけるエクソシズムと憑在論の拮抗と後者による前者の脱構築の試みの必要性和有効性を認めつつも、その議論が孕む危うさを見ておかなければならない。それは、「市場」、「流通」、「交換可能性」、「等価性」といった言葉によって、亡霊性を名指そうとするとときに現れる。商品の亡霊性の淵源を商品流通(商品-貨幣-商品)の「無限のプロセス」に求めることは、亡霊的なもののポテンシャルを市場の自明性あるいは交換の透明性のもとに切り縮めてしまう危険性を含みもつ。たとえば、流通の「始めも終わりもない系列」にのみに照準することは商品の身体(使用価値)の奇怪さを、貨幣が代表象しかつ統御する同一性としての交換価値へと還元させてしまうことになりかねない。また、商品-貨幣-商品の無限プロセスとしての流通は、使用価値であり交換価値であるような商品性を束の間現出させはするが、他方で流通過程のよどみない流れを担保するために商品の亡霊的身体を一面的なものに方向づける。とりわけ、「貨幣商品」すなわち貨幣として機能する金に対して、そのような流通過程の規制的圧力が働く。実際、デリダはそのことに自覚的であり、先の引用の直後に次のように付け加えている。

その上、〈貨幣商品〉(Geldware)の使用価値もまたみずから「二重化する」のだから。自然の歯の代わりに金製の入れ歯を入れることはできるが、その使用価値は貨幣の特殊な社会的機能である「形態的使用価値」とマルクスが呼ぶものとは別のものである。⁽¹²³⁾

ここでデリダは、商品の亡霊性の問題を、商品-貨幣-商品という流通過程の「無限のプロセス」を用いて説きながらも、その問題が流通における統御された交換可能性に還元されることを拒むかのように、「貨幣商品」(金鑄貨)の二重の使用価値(貨幣、金歯)の事例に言及

(123) *Ibid.*, p. 257 (同上、同頁)。

している。しかしながら、「貨幣商品」は流通の継ぎ目のない「無限プロセス」のなかにあるかぎり、価値の尺度、流通手段といった貨幣としての特殊な社会的な使用価値であることを強いられ、それ以外の使用価値——金歯や装飾具の素材となる、あるいは端的に退蔵されるなど——の可能性は抑圧される。デリダが強調するように、流通がそのような「無限のプロセス」であるかぎり、貨幣商品の二重化は生じない。ここには、ある背理をまえにした態度がある。それは流過程に準拠点を置きながらも、流過程の外部をどうにか指し示そうとする態度である。なおも、デリダは流過程の「外」を模索し続ける。後続する段落では、商品の交換可能性の問題が、「反覆可能性[it  rabilit  ]」「根源的反覆可能性[it  rabilit   originaire]」という語彙で言い換えられている。

いかなる使用価値も、他者にとって役立つあるいは他の機会に役立つという可能性によって印づけられているので、この他者性もしくは反覆可能性は、使用価値をア priori に等価性の市場に投げ入れることになる（その等価性とは、当然のことながら、つねに非等価物のあいだの等価性であり、われわれが先ほど述べていた二重の社会要素[socius]を前提としている）。その根源的反覆可能性において、使用価値はあらかじめ約束されている、交換へと、さらには交換の彼方へと約束されている。⁽¹²⁴⁾

こうしてデリダは「根源的反覆可能性」という言葉で流通における交換の領域のみならず、「交換の彼方」にも亡霊性の圏域が及ぶことを示そうとする。ここにも、亡霊的なものを印づけるために流通の形象を用いつつも、それが市場流通のよどみない流れによって馴致されぬよう苦心するデリダを見ることができる。そのような配慮は、いわば亡霊性の思想が〈透明な貨幣〉のイデオロギー——まさに柄谷がデリダを援用しつつ批判したような——に墮することを阻止することへと向けられている。ここで、デリダはアンチノミーのまえに立っているといえる。それは、マルクスが資本の形成について立てたアンチノミーに似ている。

つまり、資本は流通から発生することはできないし、また流通から発生しないわけにもゆかない。資本は、流通のなかで発生しなければならないと同時に流通のなかで発生してはならないのである。⁽¹²⁵⁾

(124) *Ibid.*, (同上、同頁)。強調はデリダ。

(125) *Das Kapital*, MEW23, p. 180; 『全集』23-a、217頁;
V.F.-P., p. 186.

彼「資本家の幼虫としての貨幣所持者—引用者註」の蝶への成長は、流通部面で行われなければならないし、また流通部面で行われてはならない。これが問題の条件である。ここがロドスだ、さあ跳んでみろ！⁽¹²⁶⁾

この件の「資本」を「亡霊」へと入れ替えれば、デリダの憑在論のアンチノミーが得られる。「亡霊は、流通のなかで発生しなければならないと同時に流通のなかで発生してはならない」。商品の亡霊的身体は流通過程においてこそあらわれるが、同時に流通過程に還元されてはならない。『資本論』の商品に関する分析を読むデリダは、このアンチノミーを黙示的なかたちで提起しつつも、それに対する明確な答えを提示することはなかった。実際に「跳ぶ」には至らなかった。『資本論』に取り組むデリダの筆致はこのアンチノミーの周辺で行きつ戻りつし、幽霊のように彷徨っているように見える。

4-3. デリダと柄谷——亡霊、貨幣、恐慌

柄谷のマルクス論を見てきたわれわれは、デリダのアンチノミーを引き受け、それに対して一つの「跳び」方を示すことで応じなければならない。商品に憑在する根源的な反覆可能性、複数性、他者性を、市場あるいは流通における統御された交換可能性に還元しないために、いかなる契機が必要なのか。ここで、デリダが『マルクスの亡霊たち』で直接扱わなかった「価値形態」の問題を、商品の憑在論へと接続しなければならない。

われわれはすでに、柄谷による『資本論』読解において「価値形態」の抑圧とその回帰としての「恐慌」の問題を見ておいた。価値形態(貨幣)における「空間化=間隔化」^{エスバスマン}の作用は、一方で商品(相対的価値形態)と貨幣(等価形態)の非対称性として現れ、「命がけの飛躍」を、すなわち売ることの困難性をもたらす。他方で、それは商品の流通過程($W-G-W$)を売り($W-G$)と買い($G-W$)に分断し、そこに資本蓄積の可能性とともに恐慌の可能性を準備する。そして、価値形態の探究から見えてくる商品と貨幣の隙間、売りと買いを分かち間隔といった流通過程における「あいだ」の場所性こそ、デリダがアンチノミーの前で指し示そうとしていたもの、すなわち透明で遅延のない商品流通には還元しえない使用価値の亡霊的反覆可能性と複数化を呼び込む契機であると言えないだろうか。たとえば、こう問うてみよう。

(126) *Das Kapital*, MEW23, p.181; 『全集』23-a、218 頁;
V.F.-P., p. 187.

デリダが『経済学批判』から引いてきた「貨幣商品」の使用価値の「二重化」(金が貨幣にもなり、金貨の素材ともなる)という事態——それは、亡霊の反覆可能性が流通のW-G-W(商品-貨幣-商品)の過程には収まらない剰余を含みもつこと示す例であった——は、どのような局面において出来るのか。マルクス-柄谷的な解答は次のようになるだろう。それは売り(W-G)と買い(G-W)の「あいだ」で生じるのだ、と。売りと買いの「あいだ」を、時間として見れば、商品所持者が自分の商品売って貨幣と交換してからその貨幣で他の商品を買うまでの狭間の期間であり、商品所持者が貨幣を所持している期間として考えられる。そして、この「あいだ」の時間にこそ、貨幣商品としての金は貨幣機能とは別の使用価値へと、いわば錯乱的に変態する可能性をもつ。貨幣がただちに支払手段として使用されないという条件なしには、すなわち流過程の「あいだ」なしには、「貨幣商品」の使用価値の二重化は生じえない。ただし、この「あいだ」を市場の外部、流過程に外的なものと考えてはならない。市場での流過程は貨幣の媒介なしには不可能であり、そしてまた貨幣の媒介は必然的に売りと買いの分離をもたらすのである以上、「あいだ」とは流過程の外ではなく、むしろ流通に不可欠な内在的契機であり、流通の可能性の地平をなすものである。したがって、アンチノミーへの応答はこうなる。亡霊は、遅延のない流過程(W-G-W)の「無限のプロセス」から生じるのでもなく、流過程の外部から到来するのでもない。亡霊は流過程の隙間、売り(W-G)と買い(G-W)の「あいだ」に生じるのだ、と。

このように見てくるならば、柄谷のマルクス読解が強調する流通の「あいだ」に生起する恐慌を、デリダの憑在論へと接続することも可能であろう。デリダは、「亡霊」あるいは「^ル回^グ帰^ナするもの=幽^ン霊」における不意の到来を、「錯時性[anachronie]」という特異な時間性において捉えているが、その際に足がかりとなるのが、『ハムレット』の一節«The time is out of joint»、とりわけその一節の複数の仏訳がもたらす多義性である。The timeという「時間」であり、「世界」であり、「時代」でもあるようなものを、蝶番を外され、調子を狂わされ、逆さまにされたout of jointへと至らしめるものが亡霊性として名指される⁽¹²⁷⁾。またその亡霊の錯時性は、他者、死者、過去の不意打ちの到来、そういった到来への開けであり、したがって現在あるいは現代への「時ならぬもの[l'intempestif]」の回帰として位置づけられる⁽¹²⁸⁾。

こういった『マルクスの亡霊たち』における憑在論とのアナロジーでいえば、柄谷が『資本論』に見た貨幣あるいは価値形態は流通の「蝶番[joint]」であったと言える。しかもそ

(127) Jacques Derrida, *Spectres de Marx*, op. cit.,
p. 43-44 (前掲邦訳、55-57頁)。

(128) *Ibid.*, p. 129 (同上、172頁)。

れは、「命がけの飛躍」を強いるような困難を孕む接合部であり、さりながら正常な流通過程の意識には隠されている無意識的な接合形態でもあった。だが、その蝶番がつなぐ売りと買いの分節関係が意識され、そこに「あいだ」があることをなにかば暴力的に顕在化させるのが恐慌であった。恐慌とはまさに流通の out of joint であり、始原的で不可視の形式の回帰であった。^{グラマトロジック}柄谷による『資本論』の文字論的な読みに基づくならば、こういった流通過程における隙間あるいは分節化の特異点は、空間化^{エスパスマン}=間隔化としての差延の運動として捉えることができた。ここではさらに進んで、流通に穿たれた「あいだ」に反覆的に回帰する恐慌を、亡霊性の錯時的な到来として把握することができるだろう⁽¹²⁹⁾。流通過程の「あいだ」という亡霊性のトポスにおいて、柄谷の視線とデリダの視線は確かに交錯するように思われる。

結び

本稿では、まず60年代末のデリダの『グラマトロジー』のエクリチュールの思索が、ジャン＝ジョゼフ・グーと柄谷行人のアナロジー的思考を介して、『資本論』へと結びつけられるさまを見た。グーにおけるマルクス－デリダ理論は、生産過程における労働－エクリチュールの迂回・遅延化の運動を価値－意味を生み出す源泉と見做し、その生産過程が一般的等価物としての金－パロールによって統御される価値－意味システムのもとで隠蔽される不可逆的な歴史過程を批判的に炙り出していた。それは生産における「差延」の理論であり、同時に生産を支配し不可視化する流通（事後的体系）に対する批判であった。一方、柄谷は貨幣と商品の原形式である「価値形態」に「原エクリチュール」の運動を重ねる。それは流通過程における売りと買いのギャップ、商品が貨幣へと転身するときに飛び越えねばならない裂け目を見出し、そういった隙間に意味作用を可能にする「空間化^{エスパスマン}=間隔化」としての「差延」の運動を見る思考であった。と同時に、この流通過程の不可視の「あいだ」は反覆的に到来する恐慌の可能性を開く。それは「事後」的な体系——それは本来不透過である貨幣－エクリチュールを透明で中性的な媒介に還元することにより現れる——に始原的な「事前」が侵入する契機であり、価値形態という商品世界における無意識の形式の反覆的な回帰として捉えられていた。この流通の「あいだ」と恐慌へのまなざしが、柄谷による文字論的なマルクス読解をグーのそれから決定的に分かつ。

これら60年代末の初期デリダの仕事に淵源する、あるいはその近傍にあった、二つの試

(129)『マルクスの亡霊』のなかでも、out of joint を espacement と結びつけて論じている箇所がある。デリダは、現代においてとりわけ情報と通信に関わる「技術－遠隔－メディア的諸装置」によって可視化されている「脱臼=脱場所

化[dislocation]」の運動と、それに対し反動的に噴出している「共同体、国民国家、主権、国境、土地、血」に関するアルカイックな概念と幻想について触れるなかで次のように語っている。「そもそも脱臼=脱場所化のプロセスは安定

みから、90年代のデリダ自身の手によるマルクス論を見返すとき、とりわけ『資本論』に関する論究に限定するかぎりでは、デリダのマルクスへのまなざしは柄谷のそれと近いところにあることが確認できる。柄谷とデリダはともに、商品あるいは商品形態を生産からではなく流通から捉える視座を共有している。その点で、両者は生産・労働という局面においてデリダとマルクスの遭遇を目論むテル・ケル派のマルクス—デリダ主義とは一線を画する。また、労働価値説の言説から脱して、価値形態と貨幣の還元不可能性をまなざすマルクスに可能性の中心を見る柄谷の立場は、『グラマトロジー』における「エクリチュールの貶斥」に抗する初期デリダと相通じるばかりでなく、商品の亡霊性を排除せんとするエクソシスト・マルクスから亡霊性を引き受ける憑在論的マルクスを救い出そうとした90年代のデリダとも響き合うように思われる。『マルクスの亡霊たち』の憑在論の観点から見返すならば、柄谷が描くマルクスは、貨幣の悪魔祓いに抗するマルクスであると言えよう。商品に労働価値が実体化されているとする古典派経済学が貨幣を厄介払いしたのに対し、マルクスは貨幣の根源的な形態としての「価値形態」と「恐慌」におけるその亡霊的回帰を見たのだ、と柄谷は言う。デリダとともに、柄谷もまた『資本論』に亡霊的なものを見てとっていた。デリダの『資本論』読解は、価値形態の問題を迂回するかたちで、流通過程論から商品の亡霊性を示すものであった。だが、デリダは流通過程に亡霊の出現を垣間見ながらも、その定在をはっきりと見定めることはなかった。柄谷のマルクス読解は、流通過程においてデリダが立ち止まったその先に、亡霊の姿とそれが現れる場を見据える。すなわち、恐慌という亡霊の姿を浮かびあがらせ、流通過程の「あいだ」という亡霊が回帰するトポスを指し示す。この意味において、デリダが『資本論』のなかに認めたエクソシズムに抗する憑在論的マルクスという形象は、柄谷のマルクス論を経由することで、より明確な像を結ぶように思われる。その像は、『グラマトロジー』というマルクスからは遠く離れた光源から発し、柄谷という読者を反射鏡として、『マルクスの亡霊たち』のデリダへと時ならず到来する亡霊の残影と言えるかもしれない。

化の積極的条件なのであり、それは絶えず安定化を駆動する。[…]たとえば、いかなる国民的根つきも、まずは、場所を移された—もしくは場所を移されう—人々の記憶あるいは不安のなかに根づく。《out of joint》とは、時間だ

けではなく空間であり、時間のなかの空間であり、空間化=間隔化なのだ」(Jacques Derrida, *Spectres de Marx*, op. cit., p. 137 (前掲邦訳、181-182頁))。強調はデリダ。